

最弱無敗の神装機竜IFー黒の戦姫ー

情報屋迅龍牙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最弱無敗の神装機竜……この物語は原作とは話が異なり、オリジナルやオリジナルの神装機竜を多数出していきます。なお、一部キャラクターはそのままです

タイトル変更しました（11／16）

目 次

キャラ紹介（上げ直し）	1
リーゼシャルディ編	
プロローグー黒き戦姫ー	
第一章ー私と王子ー	
第二章ー無敗の戦姫	
第三章ー毒竜と飛竜	
第四章ー旧帝国と新王国（前編）	
第四章ー旧帝国と新王国（後編）	
第五章ー決戦！暴食竜降臨	
間話　：黒姫ラジオ	34
コラボ回	
時空の切れ目・世界の繋がり	38
時空の繋がり・パラレルワールド	41
世界再臨・パラレルバス	45
超戦闘・歴代ラスボス襲来（前編）	48
超戦闘・歴代ラスボス襲来（後編）	56
現実と非現実・True·the·parareru	60
間話番外　：黒姫ラジオ	65
クロノルシフアーブ	
鍵の守り手	
ルインの攻略	69
対決　アジ・ダハーカ	73
間話　：黒姫ラジオ	78
	83

セルディアス編

女嫌いの紳士

召集令状

ラグナレクとフィールズ

人間としての意味とは？

戦士としての忠義

間話：黒姫ラジオ

切皇白夜&コラボ編

執事と妹

赤歯車ノ機械人

蒼歯車ノ機械人

117 114 111

106 101 98 95 92 89

キャラ紹介（上げ直し）

最弱無敗の神装機竜IF

キャラ紹介

名前

ルノ・アーカデイア

使用装甲機竜

ワイバーン

バハムート

キャラ詳細

ルノ・アーカデイア

本作主人公で原作でいうところのルクス・アーカデイアではあるが、本作ではルクスの妹ことアイリと設定を反転させ

病弱で体力は人並み以下であるためバハムートを使うと一ヶ月は余裕で眠ってしまうほど…そのため、バハムートは、滅多なことがない限り使わない。そして、バハムートを使うと命が削られていく：

名前

リーゼシャルディ・アテイスマータ

使用装甲機竜

ティアマト

キャラ詳細

リーゼシャルディ・アテイスマータ

本作外伝主人公であり、ルノ・アーカデイアの婚約者予定の王子である。

原作でいうところのリーゼシャルテ・アテイスマータではあるのだが性格はとても冷静で、ルノの身体のことをフィールス以外で初めて知つたものであるため、ルノの身体を治すために全力を尽くしている。無論、機竜の整備力はピカイチである。

名前

クロノルシファー・エンフォルク

使用装甲機竜

ファフニール

キヤラ詳細

クロノルシファー・エンフォルク

原作のクルルシファーで、ルノを自分の恋人とし政略結婚を逃れようとしたが、アルテリーゼが自分のことを好きだと気づき恋人として同棲を始めた、その後ルノの身体の状況を聞き、リディと一緒にルノの身体を治すために頑張っている。もちろんエクスファーである

名前

フィールス・アイングラム

使用装甲機竜

テュポーン

キヤラ詳細

フィールス・アイングラム

ルノと幼馴染でルノの良き理解者。

原作同様ユグドラシルの種を身体に埋め込まれて入るが、これは自分がルノに近づくための一歩だと言い、自らの力でユグドラシルの種から、勝つほどの精神力の持ち主である。

名前

セルディアス・ラルグリス

使用装甲機竜

リンクドバルム

キヤラ詳細

セルディアス・ラルグリス

原作のセリスであり、その性格はとても紳士で、自分が学園を長く開け、ルノが教師をしている事を知り、学園からの退校を求めるほどに、女性嫌いなのかと思われていたが、それは全くの逆でルノを守るためにしていったことである、そのためルノは自分はこの学園で皆さんと一緒に、残りの人生を過ごしたいと言ったことから、ルノを筆頭に、生徒会が設立された。

名前

切皇白夜

使用装甲機竜

夜刀神

キヤラ詳細

ルノの元婚約者候補でルノを守るためなら命をかけるほどに忠誠心が強くりディ、クロノ、フィールス、セルディとは、とても気が合うほどに仲がいい。

もちろん、洗礼を受けています。

名前

アイリ・アーカデイア

使用装甲機竜

ウイルヘルム

キヤラ詳細

アイリ・アーカデイア

こちらはルノとは逆に身体が強く神装機竜を使うことが出来るのだがその強さあまり、並の装甲機竜では付いてこれないため、新たに発掘された神装機竜ウイルヘルムを専用の神装機竜とした。

名前

スクアーロ・ローゼンベルク

使用装甲機竜

ウムガルナ

キヤラ詳細

スクアーロ・ローゼンベルク

ローゼンベルク財閥現最高取締役その成果かなり精神をすり減らしておりとても気性が荒くなってしまっているが本当はとても優しい性格で、ルノに倒させた後しつかり休むようにと説教されてしまつたとか・・・

名前

カイゼル・サーシエス

使用装甲機竜

フェルニゲシユ

キヤラ詳細

カイゼル・サーシエス

元傭兵で今はクロスファイード学園長レリイ・アイングラムの夫をしている。しかも、ルノの正体を一番最初に知った人でもあり、ルノにとっては、父親のような人だとか・・・

名前

轟幻舞

使用装甲機竜

天照大御神

キヤラ詳細

轟幻舞

クロスファイードより遙か極東に位置する国、日本帝国の機竜使いにして、ルノ・アーカーティアの過去と秘密を知っている唯一の男。使用者の神装機竜、天照大御神は、日本帝国のとある地方の地下にあるルインより発掘された、日本帝国にたつた一機しかないものである。

名前

アルフィス・カナン・エグレール

使用装甲機竜

カンナカムイ

キヤラ詳細

アルフィス・カナン・エグレール

スクアーロ・ローゼンベルクのメイド並びに許嫁ローゼンベルク財閥を裏から支える人間でスクアーロからも気に入られており、来月くらいには結婚も・・・

名前

ハルヴァリル・クロイツナー

使用装甲機竜

アジ・ダハーカ

キヤラ詳細

ハルヴァリル・クロイツナー
原作キヤラのバルゼリット。今作ではヤンデレキャラとなつてい

ます。ちなみに百合です・・・

名前

アイリス・フィール・エクスフナー

使用装甲機竜

ヴァースキ

キャラ詳細

アイリス・フィール・エクスフナー

クロスファイードに通う3年生、キャラ詳細こそ、エクスフナーとなっているが現在の姓はAINツベルンとなっている。え？ F○t
○？違うよ？オリキャラだよ？

名前

ヘイズ・ヴィー・アーカディア

使用装甲機竜

ニーズヘッグ

キャラ詳細

原作と同じ立ち位置ではありますが
旧帝国と新王国(後編)にて、逃げている最中に恋仲になります。要
するに原作とは、性格が違うのである。

名前

レイス・サーシエス

使用装甲機竜

ニルヴァーナ

キャラ詳細

レイス・サーシエス

カイゼル・サーシエスの実の弟にして兄とともに旧帝国を滅ぼしそ
の後消息を立っている…しかし今は…

名前

切皇ナユリ・アーカディア

使用装甲機竜

無し(今後出す予定)

キャラ詳細

ナユリ・アーカディア

ルノとアイリの妹にして、アーカディア旧帝国の生き残り。とある事件に巻き込まれ、凌辱された所を白夜が救出し、白夜の故郷、大日本帝国に連れていったが、その事により死亡したと思われていた。その後髪の色がアーカディアの姓を持つ者の特有の銀色ではなく、青がかつた黒になっている。ちなみに、切皇の姓を名乗っている理由としては、嫁入りしたからである。

リーゼシャルデイ編

プロローグ 黒き戦姫ー

プロローグ

黒き戦姫

なあ、あれはなんだ？

あれか？あれはこの腐った場所をぶつ壊した、言わば『戦姫』だ
なあ・・

戦姫？

そうだ、で？てめえはどうしたい？

俺はもう生きる場所なんてないんだよ

は！ははは！

何がおかしい？

お前は、面白い・・

くれてやるよ・・てめえが1人で強くなれるものをな
後はテメエの勝手だ・・

「綺麗だ・・」

「なぜ？あんなにも・・綺麗なんだ・・」

5年後・・

「ま、まつてえ♪」

私の名前はルノ・アーカデイア

私は今、とある人を追いかけている。

食い逃げ犯だ・・何でこんなことに・・

「はあ、はあ」

「むぐう！」

「はは！やつたぜ！」

「む！むぐう！」

な！つ、捕まつた！？どうしよう！？

このままじや私・・あんな事やそんなことをされて！？
「ちょっと失礼？」

「ああ!?

「うお!?

「いてえ!?

あれ? 助かつた?

「大丈夫ですか? お嬢さん」

「は、はい!」

「それは良かつた」

あ、この人もしかして、クロスフイードの…

「テメエ! 何しやがる!」

「それはこつちのセリフだねえ?」

「そいつは咎人だぞ!」

「咎人?」

あ! それは… もう逃げられないよおお!?

「お嬢さん、お名前をお伺いしても?」

「はい、ルノ・ルノ・アーカディアです」

「ルノ!」

「会いたかつた!」

ほえ! な、なに!?

「な!? テメエ! 咎人にあいたかつただあ!?

「彼女は俺の婚約者だ! 咎人ではない!」

え!? 婚約者!? もしかして!?

「リーゼシャルディ王子?」

「はい! 久しぶりですね! ルノ!」

ええええええ!

どうしてこうなるのおおお!?

私は今とても驚いていた。理由としては、私の目の前にいる人、リーゼシャルディ・アティスマータ王子が、私のことを婚約者といったことから始まる。

「え!? わ、私が婚約者!?

「そうだ、ルノ、クロスフイードに行こう

え? 今なんていたの? クロスフイードに行こうって言つたの!?

「この野郎！無視してんじゃねえぞ！」

「うおおりあ!!」

うわあ！

「全く野蛮な方だ」

「え!?」

「ゴン!!

「え？助かった？」

「では行きましょう、ルノ」

「は、はい・・・

ど、どうなつちやうんだろう・・ま、まさか!?あんな事やそんない

とをされて!?

「ルノ?どうしました?」

「いえ?何でもないです!」

そして、私たち2人はクロスフイードに向かつた

「わあ・・ここが学園城塞クロスフイード・・・」

「さあ、中へ行こうルノの妹も待っているよ」

え?妹・・・?

私に会いたい人が、なんで私の妹になるんだろうか?

「さ、こつちだ」

「は、はい!」

とりあえず私は付いていくことにした

でも?どこまで連れていかれるんだろうか?

「どちら様ですか?」

「アイリ、私だ」

「どうぞ、お義兄様」

お義兄様!え?何?アイリはもう知ってるの!?

「ようこそ、クロスフイードへ、お姉様」

「久しぶり、アイリ・・・」

「いえいえ、ですが、5年ぶりですね。お姉様」

そう、私とアイリが会うのは、5年ぶりである。その理由は、私が
雑用咎人、アイリが監視咎人として、王都と街へ分けられてからの話

であるが、今はそんな事どうでもいい。

「でも？なんでアイリがクロスフイードに？」

「あれ？言つてませんでしたつけ？」

「私、今ここで教師をしているですよ？」

「え！」

若干15歳で！？な、なんて高スペックな妹なんだ・・私もそれなりに頭はいいほうなのだがいつもアイリには負けてしまう。

「やつぱりアイリはすごいなあ」

「そんなことありませんよ」

「所でアイリ、私も話がしたいんだが・・」

「あ、すいませんお義兄様」

「ねえ？アイリ、なんで、リーゼンシャルデイ王子を、お義兄様つて・・」

「それは、ルディお義兄様に聞きましたか？」

「お姉様と、お義兄様は婚約者ですよ」

「どうしてそうなつたか聞きたいんだけど・・」

第一章ー私と王子ー

ー私と王子ー

初めましてみなさん、私の名前はアイリ・アーカデイアです。今からお姉様とお義兄様が、どうして婚約者同士になつたかお話しします。

「どうしてそうなつたか聞きたいんだけど・・・」

「分かりましたお話しします」

「事の発端は、お義兄様の、叔母上現在の女王陛下が、お義兄様に結婚の話を持ち出したことから始まるんですが」

「え？ 王子に見合い話？ それで何で私が出るの!?」

「そこでなんで私が・・・」

「お義兄様は、知っていましたよ、お姉様が、黒き戦姫だと」

「え！」

「うそ！？ 王子に知られていた！？」

「いつから、知っていたんですか？」

「君が、旧帝国を滅ぼしたその日から」

「私が・・・滅ぼしたことを探つていて・・・」

「なら、私じゃなくてアソリでいいじゃないですか！」

「それは出来ない」

「え！？ なん、で・・・」

「俺はある日、君の戦いを見て、とても綺麗だと思った、それに、俺は君を守らなければならない」

「なぜ？」

「俺は君の、奴隸だから・・・」

「え？ 私の？ 奴隸？ どういう事？」

「あの？ 王子？ それはどう言う・・・」

「王子は、旧帝国に捕えられ、奴隸の刻印を押されてしまつたんです」

「え・・・それじゃまさか！」

「そう、私と君は主従関係ということになる」

「一部の人間は君の正体を知っている」

まさか…知られていたなんて…

「それで、私を婚約者に？」

「それもあるのだが、まずはこの学園の学園長に会いに行こう」

学園長？

「学園長？」

そう言えばクロスフイードの学園長って誰なんだろう？

「お姉様も知っている方ですよ」

「え？ 私もつてことは、アイリも知ってる人なの？」

「はい、その通りです」

誰だろう…思い当たる人がいない…

「それでは、行きましょう」

「は、はい！」

同じ頃学園長室

「はやくこないかなあ～ルーチャン」

「そんなに急かしてもいいことはありませんよ？ フイー？」

「はあ～い」

ところ変わつて学園長室前

「では、入りましょう」

「一体誰が出てくるんだろう？」

コンコン

「どうぞ～」

あれ？ この声って！？

「失礼します」

「し、しつれいしましゅ！」

「ふ・・」

「相変わらずのあがり症ね？ ルノ？」

「あ!? レリイさん！ それにフイーズ！」

「久しぶり、ルーチャン」

「なんだ、フイールスはルノの知り合いだつたか」

「うん、そうだよお」

「それでね、唐突で悪いんだけど、ルノ」

「はい？何です？」

「この学園の教師をしてもらえないかしら？」

え？ええええええええええええ！？

「な!?なんで私が!？」

「教師が足りなくてねえ、あなたになら頼めると思つたのよ」

「得意でしょ？全教科？」

「・・・」

うつわあ、すつごい目がキラキラしてる・・

「で、ですが！やるからには条件・・・」

「分かつては、そうねえ一ヶ月あたり10万でどうかしら？」

10万・・・

「そんな金額、本当に用意できるんですか？」

「もちろんよ！私を信用してちようだい！」

「はあ、分かりました。引き受けましよう

「ありがとう！ルノ!!」

はあ、どうしてこんな目に・・

—第二章—無敗の戦姫

無敗の戦姫

皆さんこんにちは、フィールス・アイングラムです。この話は、ルノが教師になる所から始まります。

「所で？ レリイさん、私が担当する学年で・・・」

「それはね」

「どこになるんだろう・・・」

「あなたの王子様に聞きなさい」

「え？ どうしてそうなるの！？」

「ん、ん！」

「え？ ルノが『担任』をするクラスですが」

「僕とフィースが、在籍している2年生になります」

「二年生か・・・」

「何とかなりそうだな、フィースもいるみたいだし

「あ、ルーチayan、俺、あんまり教室にいないからね？」

「え？ 聞こえてた？あれ？ 何で！？」

「すいません、僕もあまりいないので、代わりと言つては何ですが、
ティールに頼んでおきましたので」

「ティール？ 誰だろう

「コンコン

「学園長、失礼します」

「どうぞお～」

「え？」

「あ？ ティールくん！？」

「お久しぶりです、ルノ様」

「様は辞めてよ！」

「そーは行きません！ リーゼシャルディ様の奥様になられるお方を様
なしでは呼べません！」

「・・・硬いなあ

「それでは、ルノ様参りましょう」

「いえ、ルノ先生」

「は、はい」

ところ変わつて二年生教室

「誰なんだろなあ、新任の担任」

「可愛い人だといいな」

「だなあ」

ところ変わつて二年生教室前

「僕は先に入つていますのであとはよろしくお願ひします」

「は、はい！」

ガラガラ

「お！ティール！それで!?俺たちの担任は？」

「来ると思つてたよ・・全くこいつらは・・

「先生、お願ひします」

「は、はい！」

「ルノ・アーカデイアです！」

「また、女教師か」

「俺の妻に何か不安でもあるのか？」

「リーゼシャルディ王子！」

「ここでは、ルディでいいですよ？先生」

「は、はい」

「おいおい、リーゼ、てめえなんで女なんかの肩を持つんだあ？」

「誰なんだろう？どこかで見たことが・・・

「今言つただろ、俺の妻だと」

「は！あの堅物王子に嫁つて！笑えるぜ！」

「本当にどこかで・・・？」

「おい！雑用教師！さつさと出でいかなきや、どうなるか分かつてん
だろ！」

「あ！思い出した！

「おい！聞いてんのかア!?ぎ、つ、よ、う、きょ、う、し!!」

「ルノ！落ち着いて！」

「ワイバーン・・・

「な!?」

「それ以上の教師侮辱は退学とみなします」「もう知らん!」

「ルディ！」

「フィース?」

「アリーナの予約とつてきたよ」

「ありがとう」

「このアマア!」

「てめえをこの学園から絶てえ追い出してやる!」

「出来るものならやつて見なさい、スクアーロ・ローゼンベルク君?」

「ああ、とうとうやつてしまつた……」

「この先どうなるかなあ。」

ところ変わつて学園長室

「やつぱりやつてしまひましたか、姉さん……」

「う、ごめん、アイリ……」

「義兄様が付いていながらどうして」

「ど、どうしてだらうなあ?」

「全く、この、夫婦候補たちは……」

「はあ、こうなつたらどうしようもありませんね……」

「やるからには、勝つてくださいね?」

「わかつてるよ……それにもつとやらなきやならないこともあるしね」

「え? 何ですかそれ?」

「本当になんなんでしよう? 気になりますが、姉さんがあの顔をする時は大抵誰かが説教されてしまう時ですね……」

ところ変わつて学生寮

「ああ、やつちまつた……どうスつかなあ」

「どうしようもありませんよ、坊ちゃん」

「その坊ちやんての辞めろつていつも行つてんだろ! アルフィイス! ?」

「申し訳ありません、スクアーロ様」

「スクアーロでいいって言つてんのに……」

「この女は俺の筆頭侍女アルフィス・カナン・エグレール。俺が生ま

れてまもなくして俺に付けられた、要するにメイドな？

「なあ、アルフィス？」

「はい？ 何でしよう？ スクアーロ様？」

「本当どうすればいいかなあ」

「もう、当たつて碎けろですよ？」

「だよなあ」

「あんな啖呵切つちまつた以上やるしかねえか・・・

「頑張つてくださいね、スクアーロ様」

「はあ・・・」

—第二章—毒竜と飛竜

毒竜と飛竜

皆さんプリヴィエート？アルフイス・カナン・エグレールと申します。本日はスクアーロ様とルノ先生が戦うお話です。ですが何やら不穏な空気が…

決戦当日

「はあ、姉さん…まさかワイバーンを使って負けるなんてことがありますよね？」

「そこは心配いらないよアイリ」

全く、アイリは心配性だなあ。そう言えば私が帰つてくる頃に誰かと一緒にいたような…ま、いつか。

ところ変わつてスクアーロ控え室

「はあ、ヤベえなあ

「何がですか？」

「相手は汎用機竜でくるのに対してこつちは神装機竜だぞ？勝ちは決まってんのに…」

そう、俺が使うのは俺の家に代々伝わつてる神装機竜、ウムガルナである。

「ルノ先生は何考へてるのかなあ」

「私は、分かりますが？」

「な！」

アルフイスは、わかつてんのに俺がわからんだと!?そんな馬鹿な!?「なるようにならなりません、腹をくくつてください」

「わーつたよ」

アリーナ内

「待つてたよ、スクアーロ君」

「ご丁寧にドオーモ」

とりあえず勝つしかねえ。やつてやらア!

「来たれ、力の象徴たる紋章の翼竜。我が剣に従い飛翔せよ《ワイバー》ン』

「逆殺せよ我が毒は人薙ぎ払う猛毒なり 『ウムガルナ』」
さあて、やるかア！

「ルノは大丈夫だろうか・・・」

「心配してもどうにもなりませんよ？義兄さん」

「そうだが・・・」

『姉さんがやると決めたことは絶対に成功します。だから、心配する必要はありません、』

アイリはそう言つたが、やはり心配だ・・・

そして、先に動き出したのはルノだった。

「動いた！」

「フツ！」

「あめえ！」

「オラオラ！？どうした！？こんなもんか！？無敗の戦姫!!」

「くつ！」

「もつと攻めてこいよ！」

しまつ？

「ぐあ！」

「ルノ！」

まさか!?神装を!?

「これが俺の神装機竜、ウムガルナの神装、『ヘル・ポイズン』だ」
ヘル・ポイズン・・・話には聞いていたけど、ここまで辛いとは・・・

「どうした!?動かねえと毒が回つて死んじまうぞ!?」

頼む、ルノ先生！動いてくれ、本当に死んじまうぞ!!!
なぜ、ルノ先生は動かないのでしょうか・・・

「ち、興ざめだ・・・」

「今だ！」

「な!?」

「ぐあ！」

「てめえ!!!やりやがったなあ！」

「おらあ！！」

「どこに!?」

「拔刀術・・・『から紅の刃』」

「がはあ！」

「こんのお!!」

『キシャヤヤヤヤヤヤヤヤ！』

「なんだ!!」

「まさか!? 幻魔獸!?!」

「ガーゴイル！」

「どうしてここに!?」

「アシリ！」

「貴方・・・」

「笛の音が聞こえる・・・」

「笛?」

「大丈夫です義兄さん」

「何故?」

「どうやら、幻魔獸は1体」

「姉さんとスクアーロさんのふたりで戦えば何とかなります」

「なんで、幻魔獸が！」

「スクアーロ君・私が合図したらヘル・グランデを奴に打ち込んで・・・」

「な!?」

「やるよ！」

「くそ！どうにでも成りやがれ！」

・・・

『BGMバハムートop』

「てえやあ!!」

「は!!」

「きや!!」

「今だ！」

「そうだよな、俺も同じだよ化け物」

『ヘル・グランデ！』

「ギシャヤヤユヤヤ!?!?

「ルノ先生！」

「何とかなつたね？」

「はい!! それからすいませんでした!!」

「分かればよろしい」

「これから、ご指導ヨロシクお願ひします！」

「はい、任せました」

—第四章—旧帝国と新王国（前編）

旧帝国と新王国（前編）

皆さんプリヴィエート！スクアーロ・ローゼンベルクです！え？性格が違うって？これが俺の素だよ！悪いか！うわああん！お見苦しいところをお見せしてしまいましたそれではどうぞ

二年生教室

「それでは皆さん、首席を取ります。いいですかア？」

「お願ひしまあああす！」

「元気があつてよろしい！」

ありすぎも困るけどね？それでも元気はとてもいい事だよ？

「スクアーロ・ローゼンベルク君」

「はい！」

ウェイ！？

「スクアーロ……お前変わったなあ？」

「そ、そうか？」

「皆さん、スクアーロ様の性格はコレが素です」

「ええええええええええええええ！」

マジでえかア！？

「な、なんだよ……（じわつ）」

「え！？」

「俺だつてこの性格でみんなと話がしたいとずつと思つてたんだからな!?へんて言うなよ!？」

あ、これ、めんどくさやつだ……

「スクアーロ様……（ウル）」

な!?アルフイスさんまで!？

「あのお……そろそろ授業始めたいんだけど……」

同時刻とある廃都

「その『笛』の力うまく使つてるか？」

「この笛は素晴らしいよ！私の力も、そして幻魔獣の力も強くなつているのだからな!!この力があれば新王国など取るに足らんない！は

ははは!」

「あまり使いすぎて死ぬなよなあ?」

「分かっているとも」

まだまだ利用させてもらわなきや困るしなあ・・・ふふふ、それにまだ気持ちを伝えてやってないしな

数時間後

「さ、みんなアリーナに移動してね?」

「せんせえ〜? フィールスとルディがいませ〜ん」

「あの二人はアトリエにいるよ」

「え〜!? アトリエ!? ズリ〜!」

ま、半分は私のためなんだけどね・・・

みんなに伝えるのは、もつとあとになるかな・・・? それとも早い段階で言つた方が・・・

「・・・ノ・・生?ルノ先生!!」

「あ、ごめんなさいちょっとボーットしてて」

「大丈夫ですか?まさか!?あの時の毒が消えてないとか!? (オロオロ)」

「だ、大丈夫だよ!?もう毒はないから!!」

「そ、それならいいですが・・・」

ちよつとばかし過保護すぎるかもなあ・・・

「あ、スクア一口君、アルフイスさん私はアトリエに行つてくるからみんなの演習見ててくれる?」

「よ、喜んで!!」

「了解しました、ルノ先生」

「よろしく〜」

同時刻アトリエ

「フィール、そこのスパンとつてくれ」

「はい、」

「ありがとう」

「大分修復してきたねえ〜」

「ああ、お前がいてくれて助かつたよ」

「可愛い妻の頼みだもの」

「はは、お互に苦労するな・・・」

「まあねえ」

と、ここで皆さんに情報を、ファーリスの妻とは、アイリのことである。なぜそう至ったかの話はまたいずれ・・・
「ルディもそうでしょ?」

「そうだなあ」

ちょっと戻つて謎の2人

「それで?この後は?」

「無論だ、攻め込むだけのこと」

「失敗すんなよオ?」

「失敗などせんは!」

「はは!!高みの見物でもしといてやるよ!!」

「貴様はそれでいいのだ、それこそ、我が惚れたところなのだからな

!」

「おまえ、変態だな・・・

「な!?

ズーン・・

「わ、悪かつたよ!」

「どうせ私等・・・どうせ」

「ウマクイキノコレヨナ・・・コノバカ」

「今なんと?」

「何でもねえよ!」

このふたりは一体なんなのか!後半へ続く・・・

一第四章一旧帝国と新王国（後編）

旧帝国と新王国（後編）

アトリエ

「ふう、やつと直つたなあ」

「思いのほか時間がかつたねえ」

「そうだなあ」

俺達が今整備しているのは、ルノの機体、名をバハムートとと言つ。「と言つても、フレームの方にがたが来てただけなのにねえ！」
「そう言わってもなあ、他の整備者にやらせるわけにも行かないだろ？」

「それもそうだねえ」

なぜ、他の整備者に任せるわけに行かなかつたかは、この機体が黒の戦姫の機体だからである。

「にしても、バハムート・・暴食竜か」

「ルノちゃんには似合わないねえ！」

それもそうであろう、黒の戦姫とは、とても美しく、可憐な戦士だと未だ信じられている。その黒の戦姫が使つてている神装機竜が、暴食竜などと誰が信じまい。

「俺はある時、ルノがバハムートを使って旧帝国を消滅させたことをしつかり見ている。でもルノが言うんだ・・・」

「なんて？」

「旧帝国を破壊したのは本当に私なのかな？」

「何でまた？」

その通りである。普通、自分で壊したもの、自分ではない誰かが壊したなどとは思わない。しかし、ルノの言葉にはどこか真実のようなものが含まれているようにも思える。

サイレン音

「何だ!?」

『緊急！緊急！新王国に未確認の機竜部隊侵入！繰り返す！新王国に未確認の機竜部隊侵入！』

「未確認の機竜部隊?」

「とりあえずアトリエを開こう!」

「うん!」

その頃未確認の機竜部隊

「ここが新王国・・・」

「やつとだ・・やつと! 新王国よ! 私は帰ってきたあああああああ!」

「るつせえ!」

「す、すまぬ、ついいつもの癖が」

「全くてめえは」

「さあて、こちらで幻魔獣呼んどくか?」

「そうだのぉ』

笛の音

「我が隊に告げる! 新王国を堕とし、我らの国を取り戻すぞ!」

おおおおおおおおお!!

アトリエ

「新王国に未確認の機竜部隊が侵入してきている。その中に、幻魔獣も混ざっているとのことだ」

「幻魔獣・・」

「どうすんだよ!?

「騎士団の皆は、幻魔獣の排除と未確認の機竜部隊の殲滅だ」

「ルノ先生、あなたはここで指示を下さい」

「分かりました」

「本隊の指示は、三和音の三名、ティール、シャルス、ノワール、そしてこの私が行う」

「了解」

「ルノ、君の機竜は整備済みです」

「危険な状態になつたら私を呼んでね?」

「そうならないように努力します」

「ルディ、僕も出よつか?」

「大丈夫だ、ファイールは俺の指示が会つたらそれをルノに教えてくれて』

何だか胸騒ぎがする・・・何だろう機竜部隊の中に誰かがいる？

「ルノ先生？どうしました？」

「な、何でもないよ!!スクアーロ君も、アルフイスさんも頑張ってね！
ルディは、無茶しないように！」

「肝に銘じて起きます」

新王国内

「きやああああああああああああ！！」

「なんで幻魔獸が!!」

「に、逃げろおおおおおおお?!?」

「幻魔獸よ!!我らの目的は城を墜すこと！民を殺すのは少人数にせよ

！」

『ギイイいい!!』

「ヘイズよ、笛を吹いてもらえるか？」

「ああ、いいぜ？」

「頼む」

間接キス・・・一度やつてみたかったんだよなあ。

笛の音

新王國部隊

「ルディ！幻魔獸と敵機竜部隊を目視！」

「ティール、そのまま進軍してくれ」

「了解」

「ノワールは後方にて索敵と、補助を担当してください」

「分かりました」

「シャルス先輩は中距離にて支援をお願いします」

「了解だ」

「ティールと、前衛部隊！私に続け！」

「はい！」

敵機竜部隊

「レイス様！新王國軍、我々に向かつてきます」

「そうか、深追いはせぬで良い、倒せる数のみ倒すのだ」「は！」

「レイス、どうする?」

思いのほか早かつたな……さて、新王国よ、どう出る?

一第五章一決戦！暴食竜降臨

決戦！暴食竜降臨

アトリエ

「フィールさん、今戦況はどうなっていますか？」

「どちらが優勢とは言えないかな・・・」

「そう、ですか・・・」

ルディ・・みんな・・

「ルノ先生、俺も出てよろしいでしようか？」

「クロノくん」

彼は、クロノルシファー・エインフオルク。私の教え子であり、エインフオルク家の跡取り?になるのか?

(原作読んでる人よ・・今回は兄ではない姉だ b y 主)

「いや、ここにいて・・・」

「ですが、今のままでは」

「ルーチやん！戦況が動いた！」

「え？」

戦場・新王国上空

「くつ！」

「どうした！新王国王子！」

「くつ！こいつ、強い！どうすれば・・・

「うわああああ！」

「ティール！シャルスさん!!」

「クソ！」

「くつ！敵の強さを甘く見ていた!!

「ティール！シャルスさん!!撤退を！」

「しかし！」

「一部の者はこのまま戦闘を続行！」
「負傷者はなるべく、撤退を！」

「よそ見をするなあ!!」

「しまっ！」

「ぐああああああああああああ！」

「ルディ!!」

アトリエ

「ルディ!!」

「どうしたの!?」

「ルディが・・・墜された・・・」

「!!」

「待つてください!!姉さん!!!
「止めないでアイリ!!」

アイリ・・ルーちゃん僕は、どうしたら
くそ！なにか！何かないのか!!

学園室

このままでは、私たちの負け・・どうすれば、お父様・・私は、ど
うすれば・・

アトリエ

「姉さんが今行けば確かに勝てるかも知れません」

「ですが!!姉さんがあれを使えばどうなるか!」

「アイリ!!」

「それでも私は行くよ」

今のおでどれだけバハムートを、使えるか分からぬけど、やれる
だけやるしかないんだ

「絶対に生きて帰つてくるから」

「約束、ですよ?」

「うん!」

「ルーちゃん、これ」

「ありがとう、フィール」

「死んだら許さないから」

「分かつてる」

そして私は剣を抜きこう叫んだ

《――顕現せよ、神々の血肉を喰らいし暴竜。黒雲の天を断て！バハ

ムートー!』

私が纏うのは最凶の神装機竜・・バハムート・・・

「ルノ先生・・貴方はいつたい?」

『リロード・オン・ファイヤ』

は!早い!

「アシリ先生・・あなたのお姉さんは一体何者なんですか!?」
「皆さんにお話しましょう」

「10年前、旧帝国を破壊した”英雄”の事を」

新王国上空

「ぐああああああああああああああああ!」

「ルディ!!」

不味い・・このままでは!!

「コレで終わりだ・・リーゼシヤルデイ王子!!新王国の英雄として滅び
を待つことだ!!」

く!!

『拔刀術!・紫電!』

「何!?」

「き、貴様は!?」

「る、ルノ?」

どうして、バハムートで! そんなことしたら君は!

「ルディ? 無事?」

「そ、そんなことはあとです! なぜ来たんですか! ルノ!」
「夫を守るのは、妻の役目でしょ?」

ルノ・・・

「これは、これは、ルノ・アーカディア様、お久しうござります。」「
「そうですね、レイス・サーチエス団長」

『团长! まさか!! 旧帝国の機竜部隊团长!?

「どうしてあなたがこんな所に?」

「私は今新しい国にて機竜部隊团长を務めています」

「その機竜部隊がどうして、新王国を狙つたのかな?」

確かにそうだなぜ・・・

「私が今席を置いている国は・・・上
十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
と、言う国です」

11

なんと言つたんだ？意味がわからな
い・・・

一まさか
ヘイズが・・・

「ハイア？ レイアではなく？ ルノ あなたはいたい何を隠して…」
「ノイス団長、ムカ、刀籠状を戴威します。貴方共、ムカ止りますか

?

いえ、私は元よりとある『宝』を取りに来ただけなのでね……」

イヌ团长、ムカシアラシニコ依頼します

「阿爹？」

卷之三

「伊サの妹ニ、哉ガ王女」

「それから、ハイズの事を頼みます

卷之三

な!?逃げた?でも何か喋つていたような・・・

「ルディ！」

「は、
はい！
」

「幻魔獣を殲滅します！手伝ってください！」

「は、はい！！」

と、ともかくだ！今は幻魔獣を!!

「私は右を！」

「僕は左ですね！」

「行きます!!」

はい！

『リード・オフ・ファイヤ!!』

一神の名の元にひれ伏せ!

『アーレツンヤー！』

「ふう、何とかなりましたねルノ？」

「そ、
そ、う、
だ、
ね
・
・
・
・
・」

「ルノ!!」

「おや、すみ」zzz

ルノ、あまり。無理はしないでくださいね・・・

その頃宝を盗み出したヘイスは・・・

「姉さん、だいじよぶかねえ」

「ヘイズ・・」

「ん?なんだよ?」

「君にも、人を心配する気持ちを持つてているのだな?」

「バカにしてんのか!」

「そ、そんなことは無い!!」

そろそろいいかなあ

「なあ、れイス・・・その、なんつうか」

「?」

「わ、私と!こ、恋仲に、ならないか?」

「ヘイズ・・」

「だ、ダメか?」(ーー;)

「よ、喜んで!」

「そ、そうか!!」

何だろう、とても甘い・・ていうか!!甘すぎる!!

(甘いねえ・・・く、書きたくなかつた!!by主)

数日後

「ルノ?その後体の調子は?」

「大丈夫だよ?この通り!!」

「そうですか、それは良かつた」

あのあと、アイリに頼んで、バハムートを使った反動で何が起つていいか調べてもらつたところ、特に何も起こつていなかつたため、安堵したのだつた。そして、クロスファイードでは、ルノが黒の戦姫だとバレ、とてつもない人気が出ていたのだつた。

「あまり、無茶をしないでくださいね?」

「分かつてるよ~」

そして新たなる物語が始まる・・・

間話　：黒姫ラジオ

間話　：黒姫ラジオ

「皆さんこんにちは、黒姫ラジオのお時間です」

「本日より司会進行を務めます。リュウネ・ドラグライトで、ございます」

黒姫ラジオとは、最弱無敗の神装機竜I Fー黒の戦姫ーのプレイバック並びに一つ一つのオリジナルキャラクターを紹介していくラジオでございます。

「そして、始めてと言うことで一人目のゲスト様に来ていただきました！それではどうぞ！」

「はい！皆さんこんにちは！黒の戦姫主人公！ルノ・アーカディアです！」

「それでは、初めて行きましょう！」

「黒姫ラジオ！始まります！」

黒姫ラジオ！

トリビアコーナー

「皆さんこんにちは、黒姫ラジオ、トリビア担当のカイゼル・サーチエスです。よろしくお願ひします」

「旧帝国は、数年前に存在してた国であり、ルノとアイリの生まれた国である」

プレイバックコーナー

「はい、それではまず！プレイバックのコーナー行つてみましょう」

「本日は、どこをプレイバックするんですか？」

「それでは、こちらです！」

『なあ、あれはなんだ？』

『あれか？あれはこの腐った場所をぶつ壊した、言わば『戦姫』だなあ‥‥』

『戦姫？』

『そうだ、で？てめえはどうしたい？』

『俺はもう生きる場所なんてないんだよ』

『は！ははは！』

『何がおかしい？』

『お前は、面白い‥‥』

『くれてやるよ‥‥てめえが1人で強くなれるものをな』

『後はテメエの勝手だ‥‥』

『綺麗だ‥‥』

『なぜ？あんなにも‥‥綺麗なんだ‥‥』

「このシーンで、喋つてるのは、ルディと誰だ？」

「ええと‥‥ネタバレじゃないんですかこれ？」

「まあ、そなんだよね」

「どうしようかなあ、みんな知つてるんだけど、どうすつなねえ‥‥ん？おつと、ここでお手紙が来てしました」

「え？そななことあるんですか？」

「まあ、そなな感じです」

「どれどれえ？？」

『だ？』

「‥‥‥‥」

『気にしてたんだね』

『だなあ』

『さて、氣を取り直して！次はこちら！』

『咎人？』

『あ!?それは‥‥もう逃げられないよおお!?』

『お嬢さん、お名前をお伺いしても?』

「はい、ルノ・ルノ・アーカデイアです」

「ルノ！」

「会いたかった！」

「ほえ!? な、なに!?

「な!? テメエ！ 箕人にあいたかつただあ!?」

「彼女は俺の婚約者だ！ 箕人ではない！」

「え!? 婚約者!? え!? もしかして!?

「リーゼシャルディ王子？」

「はい！ 久しぶりですね！ ルノ！」

「ええええええ!?

どうしてこうなるのおおお!?

「この時はまだ雑用姫だつた頃だね？」

「う〜〜〜思ひ出したくないですよお〜」

「それが出世したねえ〜」

「おつと、ここでまた、手紙が届きました。なになに?」

『ルノはなんでここまで出世したんですか?』

「ああ、これは〜〜トリビアのあとで!」

「ええ!?」

トリビアコーナー

「新王国とは、旧帝国のあとに生まれた国であり、アーカデイア帝国を滅ぼしたものが建国した国もある」

質問コーナー

「さてえ〜、先程の質問ですが、ぶっちゃけますと、生徒よりいいか
なあと?」

「え? それだけですか?」

「うんそだよ?」

「み、身も蓋もないような、あるような・・・」

「さてお次は?」

「オットこれは・・・アイングラム夫婦からですね」

「なんて書いてあるんですか？」

「ええ、と、なになに？」

「フア!?」

「え？ 何が？」

『俺（私）達の子供つて出るのか（かしら）？』

「ええつと、これは、そのお・・・・・・

考えてません・・・・・・

「アイングラム夫婦様・・・ごめんなさい・・・・・・

お別れコーナー

「さて、お別れの時間がやつてきました」

「さつきの手紙の内容どうするんですか？」

「まあ、考えとくよ」

「そうですか・・・・・

ゲストとして呼ぶ時どうしよ・・・・・

「と、とりあえず」

「また次回お会いしましょ～」

「お疲れ様でした！」

コラボ回

時空の切れ目・世界の繋がり

I S × 神装機竜

I S世界

「さあて、面白いゲームを作るとするかなあ・・・」

俺の名前？俺は神童クロトだ。え？こんなキャラがいたかつて？迅さん説明を。

（今回はコラボ回です。武神鎧武さんの作品『I S 絶唱エグゼイド』と
のですby主）

という訳だ、さあてなにか無いかなあ・・・

「ク・ロ・ト！」

「はい～？」

「ばあ!!」

「うわあ!?」

ガタン!!

俺はビックリして椅子から落ちた。全く切歌のヤツめ、あ、そうだ
！ときめきシリーズを再開発しよう。

「やつた！驚いたデエス！」

「切ちゃん・・・、クロトの顔がゲスくなってるよ？」

「なんデスと!?」

「切歌よ・・・」

「く、くるデス!!

「覚えておくことだなあ・・・それ相応のバツをなあ!!」

や、やつぱりデエス!!

p r r ・・・

ん？何だ？

「はい、神童・・・」

『く、クロト!! 大変だ！なんか時空の切れ目見たいものが!!』
「な!? 何だつてえ?!』

「ウエイ!?

「切歌! 調ちゃん!!」

「了解デエス!」

「分かつた」

時空の切れ目前

「何なんでしようね? これ?」

「私に聞くなよ」

今のは、立花響と雪音クリス
「確かにな・・・」

「不快なものを感じる」

そして、天羽奏と風鳴翼だ

「ん♪」

「なにか分かつたのかしら? キヤロル?」

「さつぱりだ・・・」

「でも、どうしてこんなものが・・・」

「クロト達はまだなの?」

そして、キヤロル、マリヤ、セレナ、小日向未来である。

上空

「織斑先生、こちら辺ではありますんか?」

「む? そ、うか?」

今のはセシリリア・オルコットと、織斑千冬、もちろんほかのキャラ
もおります。

「あ、あそこじやない?」

「ホントだ、響ちゃん達がいる」

時空の切れ目前

「あ、織斑先生達だ」

「クロトたちより先に来たな」

「待たせてしまつたか?」

「いえ、むしろ早いくらいです。」

「アレ? クロト達は?」

「スマン、待たせた」

「いえ、私達も今来たところですわ」

全員集合だな・・・なぜ箒がいないのかつて?そりやまた問題を起こして謹慎くらつたからだろうな。

「さて、ほんとになんだこれ？」

ん？『ANOTHERWORLD EX-AID』が反応している？てことは別世界に繋がっているのか・・・ま、見た感じそういうなんだろうけど。

「可が起るかわうな、のこか?」
ここにいでも始まらないし、とりあえず入ってみますか

「力で代り三、代り」

せーの！

「ん？」

「ハ、フローレンス!!」

新王国クロスファイード

「ん? 何だろう、あれ?

そこで物語は最弱無敵の神装幾童編へ

۶

時空の繋がり・パラレルワールド

コラボ回2

神装機竜編

「ルノ、こちらの資料確認終わりました」

「ありがと、ルディ」

「いえ、これも仕事のうちですので」

彼はリーゼシヤルディ・アティスマータ王子、
新王国時期国王である。

そして、私の夫である。

「ルノ先生！た、大変です！」

「どうしたの!? セルス君!？」

彼はセルディアス・ラルグリス君、私の祖父の教え子だという。

「実は、空に『切れ目』みたいなものが!!」

「切れ目?」

何だろう、どこかで聞いたような展開だなあ・・・

あ、ルディも、そんな顔してる・・・

「とりあえず、行つてみますか・・・」

新王国上空

「あれかな?」

「そのようですね」

「本当にどつかで見たような・・・」

「同感です」

「え?! 見たことあるんですか!?!」

「ん~、どこだつたかなあ」

「うわああああああああああああああああああああ!!」

「え?」

「なにか落ちてきましたよ!?!」

「ありありな、てんかいだなあ」

上空・・・

「なんで空にいるんだよおおおおおおおおおおおおおお!!」

「くつそ！」

「こんなところで死ねるか!!」

「M A X 大変身!!」

『マキシマムガツシヤツト!』

『ガツチャアーン!』

『レベルマーツクス!』

『最大級のパワフルボディ! ダリラガーン! ダゴズバーン!』

『マキシマムパワーX!!』

新王国

「な!? アレって！」

「間違いあれません！あの時の！」

「ん？ん？ いつの話なんですか!?」

どおおおおおおん

「ふう、死なずにすんだア」

「あれ?、ルノさん? リーゼシャルディイさん?」

「てことはここは・・・」

「はい、私たちの世界、そしてここは、新王国です」

な!? なんだと? Berry Amazon?

だが、何でなんだ、こんなテンプレあつていいのだろうか・・・

(テンプレ言うなし by 主)

「それにしてもここが、ルノさん達の世界か・・なんか、 the 昔つて
感じですね」

「ま、まあね・・」

「クロトサアアアン!!」

「お、みんな来たみたいだな」

「みんな?」

またまた上空

「ここ、どこなんでしょう」

「我々の世界ではないようだがな」

「みんな! あれ見て!」

「あ! クロトだ!」

「ホントですわ！」

「」「」「」「」「」「クロトおおおおおおおお!!」「」「」「」「」

「え!? すつごい大人數!?!」

新王国

「お、追いついた」

「クロトのバカ!!」

「す、済まない」

「えーと、とりあえず、自己紹介お願ひ出来るかな?」

「そ、そうだな」

『ガツチヨーン』

「まずは、俺からだ、俺は、神童クロトだ、前にあつてるよな?」

「私は、立花響です! 私もクロトと同じ筈だよ?」

「風鳴翼だ、以下同文」

「同じく、雪音クリスだ」

「私も同じく、天羽奏だ」

「マリア・カデナツアヴナ・イブよ、宜しく」

「私はその妹の、セレナ・カデナツアヴナ・イブです」

「月読調・・・宜しく」

「暁切歌デエス!」

「小日向未来です。よろしくお願ひします」

「柊木友美です、宜しく」

「セシリリア・オルコットですわ、以後、お見知り置きを
ん? ん? なんだろうすごく親近感が湧く人だ (ですわね)

(それは、仕方ないんじやないかな? b y 主)

「織斑千冬だ、宜しく頼む」

「凰鈴音よ! 宜しくね!」

「シャルロット・デュノアです、宜しく」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ! よろしく頼む!!」

「あれ? キヤロルは?」

「あつちに残つて切れ目が、どうなるか調べてる」

「そうか」

「じゃあ、次は私たちの番だね」

そして私達は自己紹介を始めた・・・

世界再臨・パラレルボス

コラボ回3

世界再臨・パラレルボス

「それじやあ、私たちの番だね？自己紹介・・・」

「全員はいないのでとりあえず移動しましようか？」

少女（少年）移動中

そして、I S組は目を丸くして見ていた・・・そう、クロスフィードを！

「で、でかあああああ！」

「え?!何これ?! I S学園も十分でかいけど！城じゃん!!」

（そう、クロスフィードは一つで城・何個くらいあるんだろう？ b y主）

「あははは・・・」

「クロスフィードの敷地内には整備工房が10箇所ほど存在しますからねえ~」

「マジかよ・・・」

「これは予想外・・・」

「同感だぜ、翼」

「とりあえず私の部屋に行きましょうか」

少年（少女）移動中

「ご、豪華すぎる・・・」

「もうこれ、ホテルのスイートルームじゃん・・・」

「そ、そうかなあ・・・？」

「てか、ホテルってなんだろう・・宿屋の1種かな？」

「ど、とりあえず！ルディ！他のみんなを呼んできますね？」

「了解です」

少年（少女）集合中

「姉さん、この方達が姉さんの言っていた方々なのですか？」

「うん、そうだよアシリ」

「それじやあ、自己紹介を始めましょうか！」

「私がこの学園の学園長、レリイ・アイングラムよ。宜しくね！」

「その弟のフィールス・アイングラムだ」

に、似てる……

「クロノルシファー・エインフォルクだ、よろしく頼む」

「そのお付にして婚約者の、アルテリーゼと申します。主人共々宜しく御願いします」

うつわあ、この二人甘いなあ……

（んく、今後この二人の話を書くのか・・お茶を用意せねば b y 主）
「まつたく！は、恥ずかしいことを言うんじゃない！」

「そう言わずに、旦那様」

「ぐぬぬ・・・」

まつたく、この二人は・・・ま、私も言えたことではありませんが。「私は、アイリ・アイングラムです。旧姓はアーカディアですが、今はそちらにいる、フィースの妻をしています。私も旦那共々よろしくお願ひします」

こ、こつちにもあまいふたりがいたあああああああ!!

「あははは・・・」

「じゃ、じゃ!」

「私めは、ルノ様のお付にして、この学園の門番をしております、切皇
白夜と言います」

「ちょー！白夜！」

「はっ!!す、すいません！ルノ様！ルノ様の自己紹介を邪魔してしまって！、こうなれば！切腹しか！」

「ちょー！そんなことしなくていいから!?」

うつわあ、キャラ濃いなあ・・・

「カイゼル・サーシエスだ・・・」

「もう！アイングラムでしょ！」

「む？ そうだつたな・・・」

「カイゼル・アイングラムだ」

こつちも夫婦かよ!!何人いるんだよ!!

(さあ? b y 主)

「・・・る、ルノ・アティスマータです・・・」

「かはあ!!（吐血＆鼻血ダダ漏れ）」

「る!!ルディ!!」

「ウエイ?!いつたい・・・何が・・・」

「る、ルノが・・アテイスマータと、言つてくれた（ガチ惚れ!）
え?!そこ!!てか、マジで夫婦何人員のこの世界!!

（・・・・・てへ! b y_主）

「おい！編集者！逃げるな！」

「改めて、リーゼシャルディ・アテイスマータだ、こんな性格だが基本
こんなことにはならないから・・・そこはしつかり覚えておいてく
れ・・・・・」

「あ、これ、マジだ・・・」

（クールキヤラが若干崩れました b y_主）

「とりあえず以上だね」

「はい」

爆発音

「な!?何!?」

「外からです!」

少年（少女）超移動！

「な！街が！」

「クロト！アレ！」

「な、なんだ・・・あれ・・・」

『我が名は!!ゲムデウスパラレル!この世界は!我が!滅ばしてくれ
る!!』

「なんで!ゲムデウスが!」

超戦闘・歴代ラスボス襲来（前編）

コラボ回4

超戦闘・歴代ラスボス襲来

「な、何で！ ゲムデウスが！」

『これより我はこの世界を破壊し！ 支配する！』

「支配・・・そんなこと！」

「「「絶対にさせるわけがない！」」」

「ルノさん！」

「絶対あなたを倒します！ 覚悟してください！」

『それは、我が元へ辿り着けたらの話だがな！』

『こい！ 我が僕共よ！』

『イーーー!!』

「ショッカーレンジャー！」

「ここかア？ 祭りの場所は？」

仮面ライダー王蛇！？

「さあ、地獄を楽しみな！」

エターナル！

「何が地獄だ！」

「良き終末を」

「ドクター真木!!」

「貴様たちをデータとして利用してやる!!」

「蛮野天十郎!? ゴールドライブもかよ！」

ラスボスがこんなにたくさん出てくるなんて・・・

「マルス!? まさか！ コオガネ!!」

「こんなのどうしたら!?」

「戦うしかないですよ」

「え？」

「そして勝つしかありません！」

「ルノさん・・・」

その通りだ！今弱気になつてどうする！

敵がいるなら倒せばいいんだ！

「よし！みんなやろう！」

「おお！」

『マイティアクションX！』

「大！」

『GUNGNIR HIBIKI』

「もう誰も傷つけない！」

『GUNGNIR KANADE』

「いつちよやつてやりますか！」

『AMENOHABA KIRI TSUBASA』

「防人の力、見せてやる！」

『ICHAI VAL CHRIS』

「暴れさせてもらうぜ！」

『AIRGET-LAMH MARIA』

「行くわよ！」

『AIREGET-LAMH SERENA』

「行きます！」

『SHULSHAGANA SHIRABE』

「やるよ切ちゃん」

『IGALIMA KIRIKA』

「了解デース！」

『SHENSHONJING MIKU』

「みんなは私が守る！」

『ハリケーンニンジャ！』

「忍術！」

(え？クロエが何でいるつて？・・・氣にするな！b y 主)

「「「「「「変身！」」「」「」「」」」

『ガツシャツト！』

『ガチャー！レベルアップ!!』

『マイティアクション！マイティマイティアクション

X!』

『この拳はシンフォギア

GUNGNIR HIBIKI』

『激槍 突撃 接近 破壊

GUNGNIR KANADE』

『剣の刃 防人の力

AMENOHABA KIRI TSUBASA』

『ババンバンババン

お前を狙う

ICHAI VAL CHRIS』

『AIRGET AIRGET AIRGET AIRGET AIRGET-LA』

MARIA MARIA MARIA SILVERARM』

『白銀 短剣 銀色 銀腕

AIRGET-LAMH SELENA』

『ザババ ザババ

赤の刃

SHULSSHAGANA SHIRABE』

『ザババ ザババ

緑の刃

IGALIMA KIRIKA』

『愛が秘める

この気持ち

SHENSHONJING MIKU』

『竜巻マキマキ! ハリケーンニンジャ〜!』

『バハムート!』

『ティアマト!』

『ファフニール!』

『テュポーン!』

『リンドブルム!』

『夜刀ノ神!』

「ウイルヘルム！」

「フェルニゲシユ！」

おお、いつ見ても！圧巻だなあ・・・

「私達も！」

「ええ！」

「うん！」

「了解！」

「さあ！行きましょう！」

【おおおお！】

クロト・ルノペア

「お前達が俺の相手か・・・」

「楽しませてくれよな!!」

「クロト君、私が戦える時間は限られてるから、速攻で片付けるよ！」

「了解です！」

『ソードベント』

「はは!!」

「くつ！」

『ガシャコンブレイカー！』

『ジャ・キーン！』

「せあ！」

「いいねえ！楽しくなりそうだ！」

「よそ見禁止！」

『拔刀術！『時時雨！』』

「これだ・・」

『ガードベント！』

「な!?」

「さあ、もつと楽しませろ！」

くつそーこうなつたら！でも、MAXは負担が大きい・・・仕方ない

！

「行くぞ。パラド！」

「OK！クロト！」

『マイティブラザーズXX！』

「ああ？なんだそりや！」

『ソードベント』

「だアあああああい！変身！」

『ダブルガツシヤツト！』

『ガチャー！ダブルアップ！』

『マイティマイティブラザーズ！へい！ダブルエーックス！』

『ガシャコンキースラツシャー』

「ふつ、ふえた!?」

「いいねえ！楽しくなりそうだ！そう思うだろう！エグゼイド!!」

「行くぞパラド！」

「OK！クロト！」

「うおりや！」

「ぜア！」

「ふははは!!」

「俺に本気を出させたな！」

不味い!!

『アドベント×3』

『ユナイトベント！』

『ギヤオオオオオオオオオオオオ!!』

「しまつた！奥の手を使われた！」

「こうなつたら！」

「ルノさん！一気に行きます！」

「うん！」

「ならこつちも、終わりにしてやるよ!!」

『ファイナルベント！』

「こつちだつて！」

『ガツチヨーン！キメ技！』

『ガチャーン！』

『マイティダブル！クリティカルストライク！』

『リロードオン！ファイヤ！』

「はあああああ！」

「うおおおおおお！」

『会心の！一発！』

「はあ、はあ」

「この!!俺が!?」

「ぐああああ!!」

『ゲームクリア！』

「ん？これは、クリアの証？」

「うつ」

「ルノさん！」

「パラド！ルノさんを安全なところに」
「分かつた」

響・未来・セシリリア・ルディペア

「あの蛇野郎は負けたか…ふん！さあこっちも始めるか！地獄を楽し
みな！」

「地獄なんて楽しめるか！」

「え…マジで突つこんだ!?

「…」

「…」

「し、静かすぎる…」

「つ！」

「はは！」

「え!?早!？」

「ちい！」

「お前、強いなあ～」

「それはどうも」

「こいつ…本気を隠してるな…

まだまだ力ありつてどか…

面白い！

『サイクロンマキシマムドライブ！』

「少しだけ使つてやるよ！そして俺に本気を出させろ！」

『ユニコーンマキシマムドライブ！』

「はあああああ！！」

「くつ！『神の名の元にひれ伏せ！スプレッシャー！』え？？」

「き、君はいつたい？」

「私か？私はお前だよ、リーゼシャルディ・アティスマータ」

「お、おれ!?」

「なかなかかっこいい顔をしてるじゃないか？」

「それで、君の名前は？」

「リーズシャルテ・アティスマータだ！それから私だけではないぞ？」

クロトサイド

「き、君はいつたい・・・」

「僕は、ルクス・アーカデイアと言います。」

「ルクス・・・アーカデイア？なんだろう、ルノさんに似ている気が？」

「この世界では、ルノ何ですね・・・僕・・・」

「え！やつぱりルノさん！」

「あ！？ そう言う訳じゃないよ！？」

「じゃ、じゃあ、どう言う？」

「この世界での僕としての存在が、その・・・・る、ルノさんなんだよ」

「な、なるほど」

響組サイド

「君だけじゃない？」

「ああ、この世界とは別の世界のお前達が援軍に来てやつたんだよ」「なるほど」

「それじやあ、あいつを倒すのを手伝ってくれますか？」

「ああ！ よろこんで！」

「私達・・・蚊帳の外だ・・・」

(ごめんね？ by 主)

「いいだろう本気を出すに相応しい！」

『ゾーンマキシマムドライブ!!』

「メモリの数が違う！」

「しねえええ!!

『双神の名の元に！ひれ伏せえ！スプレッシャー！！』

「いけ！リーゼシヤルディ！」

「うおおおおおお!!」

はあああああ!!

『エタリナル・ギシ・ムトテイノ!』

「はああああああ!!

「ふつ、お前の勝ちだ、守れよ……てめえの守るべきものを……」

「うわああああ！」

『ゲームクリア！』

「これは・・・いつたい？」

「クリアの証だ!!」

「やつた!!」

「これでクリアですか・・・」

あ！リーズシャルテさん！さつきは！

あれ？」

「とにかく？」

これでいいのか?【辻?】

ああこれでいいんだ……時期は俺もこの世界の中ですへてを夢見

相変わらずだな、貴様は

(ん?俺が出たつて?気にするな! b y 主)

超戦闘・歴代ラスボス襲来（後編）

コラボ回4（後編）

翼・クリス・クロノ・クルルシフアー組

「君はいつたい？誰なんだ？」

「私はクルルシフアー・エインフォルク別世界のあなたよ？クロノ君」

「なるほどね」

「それじゃあ、援護よろしく」

「ええ、いいわよ」

「あなた方に、良き終末を・・・」

「終末なんて求めてなどいない！」

「その通りだぜ！」

さすが、修羅場を通つてきただけはありそうだね・・・

「二人は、戦闘員たちを頼む！」

「ああ！」

「任せときな！」

「行きましょう！クルルシフアーさん！」

「ええ!!」

イブ姉妹・切歌・調・セルディ・セリス

「貴方が・・・私なのですね」

「という事は君は、僕と言わけか」

「君たち四人は、雑魚共を頼みます！」

「ええ!!」

「分かりました！」

「了解デエス！」

「分かつた」

「行きますよ！」

「分かつています！」

「貴方が、私なのですね」

「そういう君は俺なんだな」

「・・・」

に、似てる・・・

「私を無視するなあアア!!」

「モブは」

「黙つて・・・」

「引っ込んでてください」

『刻撃』

「なあ!?」、このわたしがああああああああああああああ!!!」

『ゲームクリア!』

「え・・・い、一撃?」

「夜架さん、後でゆつくりお茶でもいかがですか?」

「ええ、喜んで」

何なんですか、このお二方・・・強すぎるでしょう・・・
(この一人が強いのは、なぜかつて?そりやダブル夜架だもん強いっ
しょ b y主)

クロ・クル

「終末を見るのはあなただけです!」

「分かってるじゃない?」

「行きますよ!」

『フリージング・カノン!』

「無駄です、私の属性は無」

「そんなもので倒せると思つたら大間違いです・・・」

「知つてますよ!そんな事!」

『ゲイ・ボルク!』

「わ、私のしゆ、終末、が、か、完、完成し、して、しま、しまう・・・」

「心臓を穿たれれば誰であろうと死を迎えてしまう・・・それが、あなたの誤算だ」

「あれ? クルルシファーサン?」

セル・セリ

「一気に行きますよー!」

「ええ!」

「無駄なことを

「な!?」

「私たちの武器が!?」

「いけ!」

「くつ!!」

「こうなつたら!」

「セリスさん・・・」

「僕をデイバインゲートでやつの懐まで飛ばせますか?」「ええ、可能です」

「頼みます!!」

『デイバインゲート!!』

「なに!?」

『ゴルドスマツシユ! インセンディオ!』

「ば、ばかなああああああああああ!!!」

『ゲームクリア!』

クリアの証起動・・・

「な!?なんだ!!」

「クリアの証が!?」

「光ってる!?」

「ん?興味ありませんね」

「いつたい何が起ころんだ・・・」

『我への挑戦権を手に入れたものは・・・』

『神童クロト! 貴様だ!!』

「お、俺!?!」

『我を倒したいのだろう?』

「ああ!!その通りだ!』

『ならばクルがいい、決戦の舞台・・・終焉の都市へとな!!』

「みんな、行つてくる！」

「死なないでください!!!!」

「死ぬ気は無いよ」

ラストバトルだ!!

現実と非現実・True·the·parareru

コラボ回5

現実と非現実・True·the·parareru
さあて、行きますか・・・

「クロト君、コレを」

「これは?」

「とある人から預かつたものだよ、君に必要になるものだからって言つてたよ?」

「俺に必要になるもの? いつたいなんだ? 検討がつかない? 「とりあえず預かつておきます」

「頑張つてね!」

「おう!」

終末の都市・イルシユナル

「ここが・・終焉の都市・・・」

「待つっていたぞ? 神童クロトよ!」

「お前は?」

「なんで人間が俺以外にいるんだ?」

「私の名は・・『織斑一夏』だ」

「え? ・・・俺! ?」

「そうだ、俺はお前だよ」

「な、なんで俺なんだ・・でも、確かに似ている

「いてもおかしくはないだろ?」

「お前が、今存在するように! 俺が存在していてもおかしくはない!! な! いきなりかよ!!

「くっそ!!」

「どうした! 避けるだけでは意味が無いぞ!」

「だつたらこうだ!」

『マイティアクションX!』

「変身!」

「培養！」

『ガツシャツト！・インフェクション』

『ガチャーン！ レベルアップ!!』

『マイティジャングル！マイティキック！マイティマイティアクション！X！』

レツトケルム！ ハツトケルム！ テツトケルム！ ワツチニネルム！

『ガシヤコンブレイ

「「はあああああ！」」

アーヴィング

『マキシマムマイティX!』

『マキシマム！ガツシヤット！』

『ノベルマニアアアツクニ!』

『マキシマムパワーX!!』

『レベルマッケンでくるか！ならは！』

昭和ノフリ

！ワツチヤネーム？ザ：オールバグスタあああ!!』

「超培養！」

！紅蓮！爆龍劍！

しまつ！？

「ぐああああ
!!!」

「アーティ

「終わりだ！ 織斑一夏！」

……終わりになつちまうのかよ……ははは、なんてぞ

まだ、俺は何も守れずに・・・ごめん、みんな
《こんなところで終わるつもりなのかよ？なきねえなあ》

『何だ!?』

「ちよつとだけお披露目と行こうかね」「き、貴様は!!』

だ、だれだ？俺を助けてくれるのは？俺は、助けなんて

「いいから見ておけ、俺の姿を」

『仮面ライダーラグナロク!』

『ガツチャーン!』

『ガツシャット!』

「変身・・・」

『バグルアップ!』

『天に刻めライダー・・・ラグナロク！極めしラグナロク！今こそ世界は！守ら

リイイイイ！』

『仮面ライダー・・・ラグナロク』

「一撃だけ、お前にお見舞してやるよ」

『なに!?』

『キメワザ！』

『クリティカルデリート!!』

「はああああ！」

『ぐお!?』

「あとは任せたぜ？神童クロト！」

「ああ、そうだな・・・」

『ゲムデウス・・・お前の運命は、俺が終わらせる！』

『ガツチャーン』

『バグルドライバードライ!』

『A N O T H E R W O R L D E X — A I D』

『グレードオルタナティブ・・・』

「変身!!」

『ガツシャット!』

『バグルアップ!!』

『世界滅ぼせし神！再生せし神！今こそ世界に刻まれリイイイ!!』

『な!?なんだその姿は!?』

「仮面ライダーエグゼイド・アナザーゲーマー、レベルオルタナティブだ！」

『オルタナティブ・・・』

『ガシャコンブレイカー！ガシャコンキースラッシャー！』

「いくぞ！！」

『はやい？』

『ぐつ!?なんという重み!!』

『ガシャコンソード！ガシャコンバラブレイガン！』

『ガツシヤット！キメ技！』

『デュアルガツシヤット！キメ技！』

『マイティクリティカルフィニッシュ！』

『シャイニング！ダークネス！クリティカル！フィニッシュ!!』

「はあああああ!!!!」

『ぐつ！クダケチイ！』

『ガシャコンスパロー！ガシャコンマグナム！』

『ガツシヤット！キメ技！』

『ゲキトツ！ドラゴナイト！クリティカルフィニッシュ!!』

『ぬう!!』

『ゲムデウス!!これで終わりだ!!』

『キメ技！クリティカルジャッチメント!!』

「はあああああ!!」

『ぬうううううう!!!』

「はあああああ!!」

『最強の！一撃！』

「お前の勝ちだ・・・神童クロト・・・」

『オール！ゲームクリア！』

「俺の・・・勝ちだ、だけど・・・お前の思いだけは繋げてやるよ、『滅ぼされた世界』の俺」

『リロード！』

「それでも、お前は・・・」

そして数ヶ月が経ち俺たちは自分たちの世界に戻ることにした、しかし、名残惜しいな、もう少しこの世界を見てみたかったものだ。

「本当にありがとうございました、クロト君、みんな」

「礼には及びません、オレたちはやるべき事をやつだけですから」

「またいつか、会えたらいいね?」

「その時は俺と戦つてくださいよね?」

「いいよ、相手をしてあげる!」

こうして、パラレル事変は終わりを告げたのだつた・・・いつかまた会える日を願つて・・・

間話番外 : 黒姫ラジオ

間話番外 : 黒姫ラジオ

「どうも、皆さんこんにちは、今日もやつて来ました！黒姫ラジオ。司会進行を務めます、リュウネ・ドラグライトです」

「さて、今日のゲストは！IS絶唱エグゼイドより此方です」「どうもみなさんこんにちは、IS絶唱エグゼイド主人公の、神童クロトです」

「それではやつていきましょう！」

「黒姫ラジオ！START！」

トリビアコーナー

「ISとは、インフィニット・ストラatosの略称であり元々は、宇宙飛行を目的として作られたものである」

プレイバックコーナー

「さて、お次は、プレイバックのコーナー」

「楽しみですね」

「それでは行きましょう、こちらです」

「さあて、面白いゲームを作るとするかなあ・・・」

「俺の名前？俺は神童クロトだ。え？こんなキャラがいたかつて？迅さん説明を。

（今回はコラボ回です。武神鎧武さんの作品『IS絶唱エグゼイド』とのですby主）

「という訳だ、さあてなにか無いかなあ・・・」

「ク・ロ・ト！」

「はい～？」

「ばあ!!」

「うわあ!?」

ガタン!!

俺はビックリして椅子から落ちた。全く切歌のヤツめ、あ、そうだ
！ときめきシリーズを再開発しよう。

「やつた！驚いたデエス！」

「切ちゃん・・・クロトの顔がゲスくなってるよ？」「なんデスと!?」

「切歌よ・・・」

く、くるデス!!

「覚えておくことだなあ・・・それ相応のバツをなあ!!」
や、やつぱりデエス!!

「ゲスいな・・・」

「書いたの貴方でしょ！」

「あつれえ？ そうだけえ？」

「白けることすんなよ」

「すんません、それでは・・・おつとこで、お手紙が来てしまいました」

「なんて書いてあるんですか？」

「どれどれえ〜」

『え?! えつとおくこれは、どうしよつかなあ』

？』

『リュウネさんに質問です。どうしていろんな世界にいるんですか

「答えたたら？」

「いやあ、でもおく

ん〜つても、俺はいろんな世界を見たいからいろんな世界にいる
んだよア〜

「と、とりあえず！次のプレイバックです！」

ここまで・・・終わりになつちまうのかよ・・・ははは、なんてざ

まだ、俺は何も守れずに……ごめん、みんな

《こんなところで終わるつもりなのかよ？なきゃねえなあ》

『何だ!?』

「ちょっとだけお披露目と行こうかね」

『き、貴様は!!』

「だ、だれだ？俺を助けてくれるのは？俺は、助けなんていいから見とけよ、コレをな？」

『ガツチャーン』

『仮面ライダーラグナロク』

『ガシャット』

「変身……」

『バグルアップ！』

『天に刻めライダー！極めしラグナロク！今こそ世界は！守られりイイイイ!!』

『仮面ライダー……ラグナロク』

「一撃だけ、お前にお見舞してやるよ」

『なに!?』

『キメワザ』

『クリティカルデリート』

「はあああああ！」

『ぐお!?』

「あとは任せたぜ？神童クロト！」

『やつぱりあんたじやん』

『こんときはまだ、お披露目つてだけだからな!?』

『どうだか！』

「おいおい……」

トリビアコーナー

「バグスターとは、バグスターウイルスが自らの姿を形取つたもののことを意味する」

「さてえ～お別れの時間がやつてきました」

「早くないですか？」

「いや、番外編だからね、しかたないね」

「そんなもんですか？」

「そんなもんです」

「さて次回は、正真正銘黒の戦姫キャラとのラジオになります」

「それでは皆さん」

「御機嫌よ～」

クロノルシフアー編

鍵の守り手

鍵の守り手

僕は、この時代の人間ではない……そう、僕は……
「ん・・夢か・・・」

「嫌な夢を、見たものだな」

父さん・・姉さん・・・元気にしてるかな・・・?

5：00

早く起きすぎたか、買い置きがあつたから、自分で作るか。
数時間後

「おはよう、ルディ」

「おはよう、クロノ」

「今日も早いな？」

「そつちこそ、いつもよりクマがないように見えるが？」

「いやあ、わかるやつは、分かるのか・・・」

あ、この笑顔は惚氣だ

「実は、昨日ルノがお茶を入れてくれてな、それがとても美味しいでね
？」

お茶かあ・・・『彼女』のお茶、また飲んでみたいな・・・

「ん? どうした、クロノ?」

「いや、何でもない」

「それより、今日の教習どう思う?」

「ああ、あれか?」

「うん、あれ」

「どうなんだろうなあ〜」

「ルディは簡単にクリアするんじゃないのか?」

あれ? 悩んでる顔だ? 何でだ?

「いやね? カイゼル先生つて… 気難しい先生でさ、手を抜けなくて、細かいところまでやつちやうんだよねえ〜」

「ああ、なるほどね」

確かにカイゼル先生の教習時は、手を抜くことが出来ないくらいみんな集中している。

「でもまさか、カイゼル先生とルディー学園長が夫婦だったとはねえ」「全くだよ・・・」

夫婦か・・・ルノ先生とルディーも結婚するんだろうな。じゃあ、俺は、なんなんだろう?

「・・・ク・・・クロノ！」

「あ、ごめん、ボーットしてた」

「大丈夫か？」

「うん、とりあえず教習、いこ？」

「あ、ああ」

僕は・・・この学園に、何をしに来たんだろうか?それに、『彼女』はどうしてるんだろうか・・・?

そしてその彼女とは?

「クロノ様、お元気でしようか・・・」

「久しぶりに、会えますね」

クロスファイード

「はつくしょん！」

「どうした?クシャミなんてして」

「いえ、誰が俺の噂をしているような気がして・・・」

「そうか」

(今の声の主が、カイゼル・サーシュエスです b y 主)

何か言つたか?主?

(ヴえ!? マリモ!?)

「そうか・・・」

「手を止めるなよ〜?」

「は〜い」

数時間後

「あ～終わつたあ～」

「そうだな～」

「そうそう、今夜、飯を食いに行かないか？」

「飯？」

「そうだ、俺とルノ、フイースにアイリ、それとお前だ
ペアで行くなら俺、いるないだろ？」

「そう言うなよ？」

「どうすつたかなあ・・・」

「ま、いつか、分かつたよ、それで？何時に集合なんだ？」

「6時に集合な？」

「了解」

その頃

「お腹すきましたねえ・・・どこかにレストランはないでしょうか・・・」

「ん？あれは？」

数時間後

「おまたせしました」

「じゃ、行きましょうか」

少年（少女）移動中

「ここ？」

「高級そうなところですね」

「ま、まあ、少しばかり値ははりますがね？」

「い、行きましょうか」

「お、おなか、す、空きました・・・」

「ん？あ、アルテリーゼ！」

「く、クロノ様がみ、見える・・・」ガク

「マスター！ひ、一人分追加で！」

「ん、」

「は、はい・・・」

「大丈夫ですか！？アルテリーゼ！？」

「キユゞ」

・・・・・

「全く、なんの騒ぎですか？」

「！」

「あら、クロノルシフアーンじやないの？」

「ハルヴアリル・・・さん」

「さんは、いらないつて言つてるでしよう？未来の旦那様♥？」

「さ、寒気が・・・・」

「大丈夫ですか？ルノ？」

「う、うん」

「あら？アルテリーゼさんもいらしたのですねえ？」

（このクズ虫が！私の前にいないでもらいたいですわねえ？あなたがいるから私はクロノ様と結ばれないのですわあ～）

「は、腹黒い・・・・ヤンデレコエ・・・by主」

ルインの攻略

ルインの攻略

あらあ？何か言つたかしらア？

(ヴえ!? マリモ!!)

あらそろ・・・ふふふ

「何故君がここにいるんだ？」

「丁度、外で食事をと、思いましてねえ！」

本当にそうなのか・・・？

「そちらこそ、どうしてここへ？」

「俺は友人達と食事だ」

「あら、許嫁に対して随分ときついお言葉ですわねえ？」

許嫁？

「その話はまだ先の話だろう！」

「そうだつたかしらあ～？」

「こいつ・・・わかつてて言つたな・・・

「だが無意味だ・・・」

「なぜ、かしらあ？」

「俺は彼女の事を許嫁にするつもりだからだ！」

「え!?、わ、私!？」

「な!? クロノ!! どういう意味だ!!」

頼む！今度なにか奢るから！話を合わせてくれ!!

後で聞かせてもらうからな!!

分かつてるよ！

「そちらの方わあ～？」

「俺の担任の・・・ルノ先生だ・・・」

ルノ・・・ルノねえ～・・・うふふふふ!! 楽しくなりそうです

わあ!!!

「ですか・・・それでは失礼しますわあ～」

「クロノオ～!?」

「ちゃんと説明してもらおうか？」

「わ、分かつてゐよ！」

はあ、ややこしい事になつたなあ・・・

かくかくしかじか四角いムーブ

まあこんな感じなんだよ】

「なるほどね？」

「や、勘弁 ごんげん！」

殴られたう氣絶じや

「お、落ち着いてよ!?

「はあ、全くこの二人は・・・」

そん詰れない方がいいよ

じ

「何でやが？」

「あり、あれでいい」

「私達・・・結婚しました」

「？」

「な!?、私の可愛い妹が、私の可愛い妹が、私の可愛い妹が」

お、落ち着いてよ!? ルーちゃん!?

「スイーくん！」

卷之三

「誠心誠意、努めさせていたゞぎます！」

「ア イリも、
頑張つてね!!?

「姉さん・・・」

な、なんだろう、この蚊帳の外感は・・

(ん？) 何でだろうねえ？

「でも、さつきの話を聞く限り、彼女、や、ヤンデレというのではない

のか？」

「その通りなんだよなあ」

(ヤンデレコエ・・・マジコエ)

「でも、どうしようもないな」

「諦めんなよ?」

「諦めたわけじゃない」

「それに・・・シヨウタイヲシルタメニモ・・・」

「なんか言つたか?」

「いや、何でもない」

アルテリーゼ、僕は、君のような女性と、結ばれたいものだ・・・

数日後

「ルインの攻略?」

「ああ、何でも、クロスファイード近くにある、ルインを攻略するらしいんだ」

「なるほどねえ」

「これはいい機会だ、俺の正体に確信を持つためにも

「分かつた、俺も参加するよ」

「そうか!」

別所

「これを使うといい」

「これは?」

「神装機竜、アジ・ダハーカだ」

「アジ・ダハーカ・・・」

「いいですわねえ、ゾクゾクします」

(ヤンデレであり、ドMである。ガクガクブルブル)

ルイン攻略日

「これより、ルイン攻略に向かう」

「それと今回、支援してくださる方がいる」

「此方だ」

「はじめまして皆さん、ハルヴァリル・クロイツァーです。よろしくお

願いしますわ」

ハルヴァアリル……どうして君が

「それでは、ルインに向かう！各自準備を！」

ルイン付近上空

「見えた！」

「これが、ルイン」

へへこれがルインですかあ～

楽しくなりそうですねわあ～

それに、そろそろですわねえ～

「!?」

「笛の音！」

「いつたいどこから」

『ぎしゃアアああああああああああああああああああああああ!!』

「幻魔獸!!」

「総員！戦闘準備！」

「!? 今度はなんだ!!」

「ルインが、光つてる？」

今ですわ！

「ふふ、頂きましたわ」

「ぐつ!?す、吸い寄せられる!?」

「クロノくん！」

「クロノ！ルノ!!」

ルイン内部

「ん?ここは?」

「ここは、ルインの中ですよ」

「ここが・・・ルイン内部」

「凄い・・・」

「それより、ここを出るすべを探しましょう

「あ！待つてよ！」

クロノくん……ここを知ってるのかな？

「ん？雨か……」

「とりあえず、野宿しますか」

「そ、そうだね」

ざああああ

「なんで雨が降るんだろう……」

「ここが、人の住んでいた場所だらかですかね？」

「え？」

「クロノくん？」

「いえ、雨が止んだら移動しましよう」

「クロノくん……」

数時間後

「……」

「クロノくん？」

「この先だな……」

なに？この目……いつものクロノくんじゃない？

「ここって!?」

「ここが、ルインの中心部……」

「え？」

『エクスファーを感知これよりロックを解除します』

『エクスファー!? クロノくん！ 君はいつたい!?』

『俺は……この時代の人間じゃないからです』

To be CONTINUE

対決 アジ・ダハーカ

対決アジ・ダハーカ

「どういうこと? クロノくん」

「僕は、ルインの生き残りです」

「ルインの生き残り? どういう意味だろう? でも、もしかして……」

「クロ……」

ドオオオオオン!!

「な、なに!?」

『ルイン崩壊! ルイン崩壊! エクスファー並びに統率者の保護を優先!
!』

「統率者?」

「きや!?」

「ルノ!?」

『扉を閉鎖します』

と、閉じ込められた……

↑↓ :ルイン内部

「完全に出られなくなつてゐなあ！」

「・・・・」

「ねえ、クロノくん」

「何でしようか?」

「さつきの事なんだけどさ?」

さつきの・・・か

「俺は、この時代の人間じゃないんですよ」

「もしかして、ルインに関係が?」

「俺たちの種族は、ルインの鍵守、『エクスファー』と言います」

「エクスファーか、それで?」

「え?」

「聞いてたよね? この人……」

「この時代の人間じゃないけど、それって、部外者つてことなの?」

「ええつとそれは……」

何が言いたいんだ?この人は

「私からしたら、クロノくんは、クロノくんじゃないの?」

「え!」

な、何を言つて!?

「この時代の人間じゃないから何だて言うの?クロノくんは、私たちと同じ人間、それでいいでしょ?」

「そ、それは」

「ドドドドドドドド!!

「え!?なに!?

どおおおん!

「見つけましたよ!ルノ!」

「ルディ!」

「無事で何よりです!クロノも大事ありませんか?」

「俺はついでなのか?」

「そ、それは済まなかつた」

「はは、冗談だ!」

クロノくん……

数時間後　：学園一室

「姉さん、無茶しましたね?」

「ええつと、ごめんなさい……」

「全く、これでも飲んでゆつくり寝てください」

「あはは、ありがとう」ズズズズ……

「じゃ、ひと眠りするね?」

「はい、おやすみなさい」

クロノさん、これでいいんですよ?

数時間前　：アトリエ

『アイリさん、これをルノに飲ませてもらえますか?』

『これは?』

『睡眠薬です』

『何故そのようなものを?』

『それは、ルノ先生が俺の戦いに来なくていいようにと
『それは一体?』

『ごめん、これ以上は言えない』

『分かりました、ですがこれを飲んでも、姉さんは行くと思ひますけど
『ね?』

『冗談でしょ?』

『さあ?』

決戦場

「来てくれたのねえ? クロノさあくん」

「その言い方はやめてくれ」

「あらあくお気に障つたかしらア」

「なんなんだこいつの余裕は・・・」

「でもおく、私と戦う前にいゝ『あなたの従者と戦つてもらうわ?』

「なに?」

あ、アルテリーゼ!?

「さあ、あなたの主人を殺しなさいな、アルテリーゼ!」

「承知しました・・・」

「フツ!」

「ツ!?

「ファフニール!」

「バジリスク・・・」

「な!? アルテリーゼ!?

なぜ彼女が神装機竜を!?

「エレメンタル・ゼロ・・・」

「な、何だ!?

「ライトニング・・・・・」

「なに!? 来る!!

「ワイズブラッド!」

「え? 発動・・・しない!?」

「ぐああああ！」

「ああ・・・」

「どうかしらア？自分の従者にやられる気分は？」

「アルテリーゼに、なにをしたあ！」

「簡単よオ、あなた達がルインに向かつたあと、彼女が寝ている部屋に行つて、脳の中をいじつたの？分かつたかしら？」

「な!?どうやって脳の中を!?彼女が持っている機竜には、そんな力は・・・
くつ、考えても仕方ない・・・！」

「困つてゐみたいだね？クロノくん？」

「な!?る、ルノ!?」

「何故あなたが!?」

「アイリから一通り聞いてここまで来たんだけど？」

「くつ！」

「バジリスク！」

「了解しました、主

「させるか！」

「ルノ先生！『そいつを頼みます！』俺は、アルテリーゼを！」

「任せて！」

「舐めないでくださいな！」

『リロードオン！ファイヤ！』

「へえ、私の神装をコピーしたのね？」

「その通りよ？」

「だつたら、あなたのようなゲスは、一撃で終わらせてあげる
「何を言つて？」

『リアスブレイカー！』

「な!?」

「きやああああ！」

「これで終わりですね？」

「く、くつそお・・・」

「クロノくん？そつちは終わつた？」

「な、何とか・・・」

「そつか」

その後私は、クロノくんに抱がれて学園まで戻った。アルテリーゼさんは、何とか記憶を取り戻し、更には、クロノくんに対して絶対服従を誓つたとか？クロノくんは、そのことに対するこう言つたという、「絶対服従は、却下だ。俺の隣にずっといてくれる方が俺はいい」と、これは、告白かな？そのことに対するアルテリーゼさんは、「はい！私は、あなたのそばにい続けましょう」とひとこと。

末永くお幸せに～

間話　：黒姫ラジオ

間話　：黒姫ラジオ

「どうもみなさんこんにちは、本日もやつてまいりました、黒姫ラジオ
！本日のゲストを紹介しましょう！この二人です、どうぞ！」

「リーゼシャルディ・アテイスマータです」

「クロノルシファー・エインフォルクと」

「その妻、アルテリーゼ・エインフォルクです」

「あれ？アルテリーゼさん？どうしてこちらに？トリビアコーナーを
任せたはずですが？」

「じつは、とある方にやらせてくれと頼まれてしまつて」

「ん？」

「誰だ？今回のトリビア……あ！？」

まさか、まさかなんあ？

トリビアコーナー

「見なきお久しぶりです！レイス・サーシエスです。今回は、兄に変わ
り私がやらせて頂きます」

「少々ネタバレですが、私が盗んだのは……原作を読んでいればわ
かる」

（名前を忘れたんで……いつかの黒姫ラジオで解説します b y 主）

プレイバックコーナー

「さて、お次は、プレイバックコーナーです」

「それではどうぞ！」

鍵の守り手

僕は、この時代の人間ではない……そう、僕は……

「短いですね？」

「まあ、次のヤツが長いからね？」

「本当に？」

「ほんとほんと」

「でも、この時から、原作ネタをいりてましたね？」

「んく、そうなんだけど、このあとなんだよねえ！」

決戦場

「来てくれたのねえ？クロノさあくん」

「その言い方はやめてくれ」

「あらあくお気に障つたかしらアく」

「なんなんだこいつの余裕は・・・」

「でもおく、私と戦う前にいく『あなたの従者と戦つてもらうわ？』

「なに!?」

「あ、アルテリーゼ!?」

「さあ、あなたの従者を殺しなさいな、アルテリーゼ！」

「承知しました・・・」

「フツ！」

「ツ!？」

「ファフニール！」

「バジリスク・・・」

「な!?アルテリーゼ!?」

「なぜ彼女が神装機竜を!?」

「エレメンタル・ゼロ・・・」

「な、何だ!?」

「ライトニンググ・・・」

「なに!?来る!!」

「ワイヤズブラッド！」

「え?発動・・・しない!?」

「ぐああああ!!」

「ああ・・・」

「どうかしらア？自分の従者にやられる気分は？」

「アルテリーゼに、なにをしたあ！」

「簡単よオ、あなた達がルインに向かつたあと、彼女が寝ている部屋に行つて、脳の中をいじつたの？分かつたかしら？」

「な!?どうやって脳の中を!?彼女が持っている機竜には、そんな力は……」

「くつ、考えても仕方ない……！」

「困つてるみたいだね？クロノくん？」

「な!?る、ルノ!?」

「何故あなたが!?」

「アイリから一通り聞いてここまで来たんだけど？」

「くつ！」

「バジリスク！」

「了解しました、主」

「させるか！」

「ルノ先生！『そいつを頼みます！』俺は、アルテリーゼを！」

「任せて！」

「舐めないでくださいな！」

『リロードオン！ファイヤ！』

「へえ、私の神装をコピーしたのね？」

「その通りよ？」

「だつたら、あなたのようなゲスは、一撃で終わらせてあげる

「何を言つて？」

『リアスブレイカー！』

「な!?」

「きやああああ!!」

「これで終わりですね？」

「く、くつそお……」

「クロノくん？そつちは終わった？」

「な、何とか……」

「そつか」

その後私は、クロノくんに抱がれて学園まで戻った。アルテリーゼさんは、何とか記憶を取り戻し、更には、クロノくんに対して絶対服従を誓つたとか？クロノくんは、そのことに對してこう言つたという、「絶対服従は、却下だ。俺の隣にずっといてくれる方が俺はいい」と、これは、告白かな？そのことに対してもアルテリーゼさんは、「はい！私は、あなたのそばにい続けましょう」とひとこと。

末永くお幸せに！」

「なぜ私が神装機竜を？」

「そう！そこなんだよ！どうして入れたのか分からんのよ」

「え!? マジで!？」

「うん、そなんだけよね、頭の中に浮かんできたからかな？」

「「ええええ!」」

オリキヤラ紹介コーナー

「さて、気を取り直して、本日よりオリキヤラを紹介していきます！」

「さて本日はこのお二人！」

「名前

スクアーロ・ローゼンベルク

使用装甲機竜

ウムガルナ

キヤラ詳細

スクアーロ・ローゼンベルク

ローゼンベルク財閥現最高取締役その成果かなり精神をすり減らしておりとても気性が荒くなってしまっているが本当はとても優しい性格で、ルノに倒させた後しつかり休むようにと説教されてしまつたとか……」

「と、なつていますが、正直いと、つくんのめんどかつたよ」「そんなこと言っちゃうんですか!?」

「だつてさあ、龍の名前とか探すのめんどかつたもおくん」

「ええ〜?」

「さ、さてお次は!」

「名前

アルフィス・カナン・エグレール

使用装甲機竜

カンナカムイ

キャラ詳細

アルフィス・カナン・エグレール

スクアーロ・ローゼンベルクのメイド並びに許嫁ローゼンベルク財閥を裏から支える人間でスクアーロからも気に入られており、来月くらいには結婚も・・・」

「何でしようか、近いものを感じます」

「まあ、キャラ設定が似てますからねえ〜」

お手紙コーナー

「さて、お次は、お手紙コーナー」

「早速来ましたね」

『俺たち二人と、似たような奴らがいるそしだが?』

「え? 聞こえてたの?」

「こわ!」

お別れコーナー

「お別れの時間がやつてきました」

「「え! 早!」」

「ごめんねえ～？ネタが尽きたんよ？」

「「「補充してこい！」」」

「て、」とでー！さよならーーー。」

セルディニアス編

女嫌いの紳士

女嫌いの紳士

「え？ 騎士団が帰つてくる？」

「そうなのよ、ココ最近事件が続いたから急いでくるそよ」

「それで？ 私とどんな関係が？」

確かにそうなのよねえ、本当に伝えていいのかしら・・・ルノの傷をえぐりたくはないし・・・ああ!! もうどうしたらいいのよ！

「何も無いんでしたら、ホームルームに行きたいですが？」

「え、ええ、お願ひするわ？」

「そうさせて頂きます」

ルノ、教師がさまになりすぎよ・・・

頼んだのはこつちなのに、どうしてこうなったのかしら？ はあ、前途多難になりそうね・・・

アトリエ：休憩室

「ＺＺＺ」

「そろそろ起きたら？」

「ん？ ん？ あ、フイールズ

「おはよう、ルディ」

「ん、ん！ はあ、どれくらい寝てた？」

「小一時間程だよ」

「ああ、ホームルームだつけ？」

久しぶりに、ルノのホームルームが聴けるなあ、ココ最近事件が続いたからな

よし、着替えるか。

「僕は先に行つてるから」

「ああ・・・」

「ふあ～」

コンコン

「ん? 誰だ?」

「すまない、失礼する」

「な!? あ、貴方は!?」

クロスファイード … 教室

「アレ? ルディは?」

「まだ来てないみたいですね」

がらー・ドン!

「ルディ?」

「あなたがルノですね?」

「ん? どちら様で?」

「な!? セルディアスさん!?」

セルディアスって誰だ? ん? セルディアス… あ! ラルグリス伯の息子さんだ!

「貴方には、即刻この学園から出ていってもらいます!」

「え?」

ええええええええええ!!!

な、何がどうしてこうなつたの!?

あれ? 確か、レリイさんが何か言いたそうにしてたのつて? これの事!?

え! かの「女嫌いの紳士」が、この学園の生徒だった!?

「な、何故出ていかなければならぬんですかね?」

「この学園にこれ以上女はいらない!」

「・・・・・」

「聞き捨てならないな? セルス先輩」

「スクアーロ、君は黙つていろ」

「いや、黙るわけにはいかない!」

「なぜ?」

「あんたが言つた言葉は、アルフイスにも該当する、だからだ!」

「ふん、女のどこがいいんだ?」

「なんだ!」

「興ざめだ、ルノ・アークデイア、貴方は、ここにいていい人間じやない」

「ツ!? セルス、君は、まだあの事を……

「セルディアス・ラルグリスか」

確かに、お爺様の教え子にそんな名前の子がいたような……

「クロノ?」

「なんか、嫌な気分だ」

「それは、女ができたからだろ?」

「ルディ? その傷どうしたの?」

「セルスに殴られた」

「え? どうして?」

「俺が知るか」

「「「はあ」」

「遅かつたみたいですね……」

「アソリ? 大丈夫だつた?」

「ええ、何とか」

「これから、大変になりそうですね」

「そうだねえ」

学園内 : 教室

「ああ、俺は何をしているんだ!!」

「……馬鹿だな? お前」

「そ、そんなこと言わないでくださいよ! リュウネさん!」

「知るか!」

「どうしよう……」

こつちもこつちで前途多難になりそうだ

召集令状

召集令状

「はあ・・・・

「二人してどうしたんですか？ルノ？アイリ？」

只今絶賛悩み中・・・理由としては、アイリが、ファイーくんとの子供を授かつたからだ・・・名前を決めないといけないが、どういった名前がいいだろうか？

てゆーか・・・妹に先を越されて、私叔母さん！？

「あれ？ フィールスは？」

「・・・・レリイさんとカイゼルさんに絞られます」

「？」

クロスファイード : 学園長室

「それで？ どうしてこんなことになつたのかしら？」

「・・・・

こ、怖いですよ！ カイゼルさん!!

姉さんも、殺意が！？

「いや、その、先日のルイン攻略前にみんなで、レストランで、その、酒を飲んでしまい、その後、衝動的に・・・」

「なるほど・・・大方、フィールスの酒にだけ媚薬の類を入れたんだろうな」

「な！？だ、誰が！？」

「お前の嫁さんだよ・・・・

「な！？」

そ、そんな、あ、アイリが！？も、もし本当だつたら・・・・

「それで？ どうする気なんだ？」

「も、もちろん、責任は取る！」

「はあ、そういう意味じやね・・・セルティアスにバレたらどうする？」

『今』 あいつだつたら、アイリを追い出すぞ？」

「そ、それは・・・・

コンコン・・・

「はい？誰かしら？」

「失礼します、王女殿下より手紙を預かつてまいりました」

「あら、それはご苦労さま」

「それでは」

「なんだ？こんな時期に・・・」

「さあ？」

『ルノ・アーカディア』

「ルーちゃん宛？」

「そのようね」

数時間後　：学園長室

「私宛の手紙ですか？」

「そうなのよ、それで、ここで開けてもらえるかしら？」

「構いませんが・・・」

スー・・・

「え？これって、召集令状？」

「なんですって！」

「なんと書いてあるの？」

『今日、大会議場にて、ラグナレクの話し合いをする、お主も参加すべし』

「ラグナレク・・・・

まさか、ユグドラシルが？いや、でも
そんなこと有り得るのか？

「それで？どうするの？」

「もちろん行ってきます」

「そう、だつたら、フィールズもつれていきなさい」

「え？ フィーくんを？」

「今回の罰です、行つてきなさい」

「ありがとうございます。姉さん」

俺の、罰ですか・・・姉さんも甘いなあ・・・でもあります。姉

さんには、感謝してもしきれないよ。

「それで？ いつの？ 招集日つて？」

「それが・・・明日なんだよね」

「え？ 明日つて、授業入つてるはずじゃ？」

「そう言えば、2時間目に・・・入れてたわね、どうしましよう
「俺が出ようか？」

「あら、『リュウネ』戻つていたの？」

「ああ、騎士団の遠征について行つてたからな？ 急遽もどることになつてびっくりしたけどな」

「あの？ 彼は？」

「ああ、二人は知らなかつたな」

「奴は、リュウネ・ドラグライツ、自由気ままな奴ではあるが、教え方はこの学園では一番と言える」

「そんなんに！」

「それは、あんたの方だろ？」

「どうだらうな？」

しかし、彼女が、ルノ・アーカーティアか、ふふつ、楽しくなりそうだな？さて、『あいつ』にも連絡しとくか・・・

ラグナレクとフイールス

ラグナレクとフイールス

ただいま私たちは、城に来ています・・・ラフィ王女様からの召集令状を受け取り『ラグナレク』の会議に出席するのだ。

「ルーちゃん大丈夫?」

「うん・・・フィーくんは?」

「き、緊張はしてるかな?」

「だ、だよね」

コンコン

「はい?」

「失礼します、ルノ様」

「アカシさん!」

「お久しぶりです、ルノ様」

彼は、アカシ・インメルマン。彼は旧帝国元傭兵団の1人であり、私の良き理解者の一人でもある。

「まさか、アカシさんが新王国にいたとは」

「今の私は、ラルグリス伯家の跡取り息子のセルディアス様の執事でありますので」

「良かつたですね、お仕事が見つかって」

「はい」

「それでは、大会議場にご案内させていただきます」「よろしくお願ひします」

王城　：大会議場

「よく来ましたね?ルノそれから、フイールス」

「お久しぶりです、女王陛下」

「畏まらなくていいのよ」

「ありがとうございます・・・」

「フイールス?あれから体の調子は?」

「良好です」

「そう、よかつたわね」

体の調子？何のことだろうか？
フイーくん、何を隠してるの？

「さあ、会議を始めましょうか」

「今日の議題ですが……ラグナレクの卵についてです」

「ラグナレクの卵？」

「はい、それをあなた達に破壊してもらいたいのです」

「私たちがですか？」

なぜ、私たちなのだろうか？王国のドラグナイトでもいいと思うんだけど？

「発言いいですか？」

「どうぞ？」

「その卵ですが、海から出てきたものですか？」

「その通りです」

「なら、ポセイドンか……」

ルノに無理をさせられないが……

「……くん！……フイーくん！」

「は？す、すいません」

フイーくん、君は一体何を隠してるの？

「それで、卵のことについてですが、今は動けません」

「え？破壊するのでは？」

「まだ調査が終わっていないので、その後ならば」

調査、一体何を調査してるのかな？気にはなるけど、あまり詮索しない方がいいか……

「了解しました、王女殿下……」

そう言って、私達は会議場を後にした

そして、後から聞こえてきた声に、少しだけ、悲しみを覚えてしまつた

「よろしく頼みます、ルノ……」

同時刻 : クロスファイード

「学園長！ルノ教師に勝負を挑みたい」

唐突に、セルディアスが訪ねてきたのだが、これまた唐突に、ルノと勝負したいと言つてきた。

「それまたどういう事かしら？」

そう言うと、セルディアスは

「彼女には、もう、無理をして欲しくはない……だから！ルノの借金は、すべて私が返した！それでも、彼女は無理をしてしまう、だつたら！勝負に勝つて彼女を！私の、妻として向かい入れたいんだ」

セルディアスは、ルノを妻にしたいと言つた。しかし、それは無理な話であることを、彼も十二分に理解しているはずなのだが？

「本気で言つてるのかしら？」

「本気、ではあります。しかし、無理な話なのもわかっています。既にリーゼには、話を通してあります」

「あら、そうなの？それで？リーゼくんの返答は？」

『ルノは、絶対に勝ちますよ』だそうです』

ふふ、信頼されているのね？でも、彼の立場からしてみれば、少々苦い思い出になるかもしれないわね。

人間としての意味とは？

人間としての意味とは？

私たちは神じゃない！人間なんだ！

b y ブラック・ジャック（間 黒男）

「僕は・・・貴方との約束を守れるでしょうか・・・師匠」

僕の・・・いや、私の師匠は、ルノ・アーカデイアの祖父にあたる人だ・・・私は、その人に戦い方や勉学などを学んだ。しかし、私の師匠は、旧帝国のやり方を否定し、その結果・・・処刑されてしまった。

「師匠・・・」

「そんなに師匠が恋しいか？」

s i d e o u t

ルノ s i d e

「ううん・・・」

「どうしたんですか？姉さん」

「いや・・・なんでもないよ」

なんでも、ない・・・全く、この顔は何かワケありますね。姉さんは、考えてることがすぐに顔に出てきますから、わかりやすいですね。「はあ、無理してるのが丸わかりですよ」

「そ、そんなこと」

「いいから！私の膝でも使つて寝てください」

アイリ・・・私は、実に最高な妹を持つたと、心底嬉しくなった。

「ありがと、それじゃ使わせてもらうね？」

「どうぞ」

「それじゃ、小一時間ほ……ど……」

「すー、すー、

全く……姉さんは、私の気持ちなんてお構い無しなんでしょうかね？」

アカデミー：ルノの部屋

「ん？ なんでベッドに？」

「おはようございます。ルノ」

「ルディ……貴方が運んで？」

「はい、お疲れのご様子だったのとフイースが、アイリに用があるとの事だつたので」

「そうだつたんだ、悪いことしちゃつたかな？」

「全く……自分のことも考えてほしいのですがね……」

「どうぞ、ハーブティーです。疲れが取れますよ」

「ありがと、ルディ」

「ん、美味し」

ルノ……君は、どうしてそんな顔をしてるんです？ 教えてください……ルノ……ルノ・アーカデイア……

セルス邸

「な!? なんだお前は!？」

「おれは、ルノの兄……『フギル・アーカデイア』だ

「お前が!？」

フギル……フギル・アーカデイア……こいつが、師匠の

言つていた要注意人物……

「おいおい、そんな身構えるな

「何が目的だ？」

「ルノを『殺せ』

「なに!? そんなことができるわけが!？」

「出来るさ?」

「俺の力を使えば

何なんだこいつ・・・まるで、神を名乗っているような・・・

「どうする?」

「私は、そんなことは出来ない・・・」

「なぜ?」

「簡単だ!私たちは神じやない!人間なんだ!それに!私は、師匠に・・・ルノの祖父に、彼女達の安全を任せているからだ!」

ちい、あのジジイ・・・余計なことを・・・まあ、いい・・・

「また来るさ、その時は、俺に『殺される覚悟をしておけ』

何だつたんだ・・・あの男・・・

戦士としての忠義

戦士としての忠義

スタジアム

「……俺は」

「俺は、どうしてこんな道しか進めないんでしょうかね？師匠……

「待たせた、かな？」

「いえ、ちょうどいいですよ、ルノ・アーカデイア」

「それじゃ、やろうか」

「ええ、やりましょう！」

スタジアム：外

「……動いたみたいだな……」

「龍牙さん？もしかして、クラーケンが？」

「そのまさかさ……こつちも準備するぞ、琴葉」

「了解！」

スタジアム：観客席

「ルノ……」

「大丈夫さ？ルーちゃんなら勝てるよ」

「ルノ……頼むぞ……俺は、君信じてるからな！」

スタジアム

『来たれ、力の象徴たる紋章の翼竜。我が剣に従い飛翔せよ《ワイバー
ン》！』

『降臨せよ、為政者の血を継ぎし王族の竜。百雷を纏いて天を舞え、
《リンドヴルム》！』

『やはり、そちらは使わないのですね？』

『知ってるの？』

『それなりには……』

バハムート……あれをルノが使つたら……いや、使わるわけには行かない！それが、俺が師匠から教わったことの一つだ！と、そう思つた矢先、地面が揺れた。

「なんだ!?」

「地震？」

スタジア：観客席

「これは、まさか!?」

「フィース？」

「ラグナレク！」

『キシヤアアアアアアアアア!!!』

「な!?こいつは!?」

『ルーちゃん！そいつは、卵から帰つたラグナレクだ！』

「な!?こいつが!?」

「ルノは下がつていてください……」

「何を言つてるのさ！私だつて！」

「ダメだ！」

「どうして……」

「俺は、師匠に託されたんだ……君たちを……だから！俺が守る！」

「セルスくん！」

「デイバインゲート!!」

よし！懷に入れた！ここだアアアアア！！

「セヤアアアア!?なに!?」

『キシヤアアアアアアアアアアアア!!!』

「ぐつ!?ぐああああ!!」

「セルスくん！」

「おれは、俺は！」

「見てられん……」

「全くですね」

「アイリ？」

「リュウネさん……」

「行くぞ、アイリ」

「分かっていますよ」

『君臨せよ、龍の王者よ……我が呼び名にて、その姿を表せ、《エンペラー》』

「さて、姉さん……ここは、私に任せてくださいね？」

「アイ、リ？」

『救世せよ世界救いし天命龍その命持つて天臨せよ《ウイルヘルム》』

「あ、アイリが神装機竜使い!?」

「さて、何秒がいい？」

「では、30秒でしようか?」

「了解……『∞ドライブ』」

「え? いま、何秒って言った? 30秒!」

「ちよ、アイリ? ほんとに30秒で終わるの?」

「彼なら大丈夫ですよ? それよりも、お一人方の治療をしませんと」

「え?」

「姉さんは、度重なる激務とワイヤーバーン装着による肉体損傷、セルスさんは、度重なる無理な訓練の肉体疲労ですか」

「『ライフクリーン』

「え? な、なにを? て、体が、軽くなつた?」

「どうして？」

「これが、ウイルヘルムの神装ですよ？全ての傷を癒す竜ですから」「アイリ……」

「さて、向こうも決着がつきますよ？」

「全く、脆いな……これで、お前はジ・エンドだ」

『咲時雨一朧一』

『ギ!?ギしゃアアアアアアア!?』

「う、うそ！」

「ふう、じゃあとは頼んだぞ？」

「お任せ下さい『観測者様』」

観測者？何を言つて？……もしかして、リュウネさんのことを言つているのか？

数日後

「あの時は、申し訳なかつた！」

「頭を上げてくれ！もう怒っちゃいから！」

私との、戦いから数日、セルスくんは、私の関係者全員に謝り続けていた。まあ、律儀といえば、律儀なのだが……それともう1つ私が顧問を務める、生徒会なるものが設立された。

生徒会とは、簡単に言えば、生徒間で行うイベントなどを決める委員会の事だ。そして、生徒会長はと言うと、無論セルスなんだ。まあ、落ち着くところに落ち着いたかな？

???

「お前は何が目的だ？フギル」

「お前は知ってるだろ？観測者？」

「ふつ、食えん奴だ」

また別のところでは、二人の男の関係が、あつたというのだ。

間話　： 黒姫ラジオ

間話　： 黒姫ラジオ

「さてさて！黒姫ラジオの時間です！今日のゲストは！セルディニアスさんとアイリさんです！」

「皆様こんにちは、セルディニアス・ラルグリスです」「同じくアイリ・アイングラムです」

「いや～長かつた・・・つか、無理やりつくつた！」

「無理やりすぎたのでは？」

「仕方ねえだろ？次回コラボなんだから！」

「コラボしすぎでは？」

「いや、そんな、そんなことは無いよ？」

⋮(。ω。')：ガクブル

「ありありだなこりや」

「では、黒姫ラジオ、どうぞ！」

トリビアコーナー

「皆様お久しぶりです。黒姫トリビアの時間です」

「観測者・・・未だ謎に包まれた存在・・・一体何者なのか？以上黒姫トリビアのコーナーでした」

カムバック

「さて、カムバックの時間だ」

「こちらからどうぞ！」

女嫌いの紳士

クロスファイード　： 教室

「アレ？ ルディは？」

「まだ来てないみたいですね」

がら！・ドン！

「スムーズなアーティスト」

「ん？ どちら様で？」

「な!? セルディアスさん!?

セルディアスって誰だ？ん？セルディアス・・・あ！ラルグリス
伯の息子さんだ！

「え？」

ええええええええええ
!!

あれ? 雖か、ノリイヤシが何か言

事
!?

「な、何故出ていかなければならぬですかね？」

「この学園にこれ以上女はいるない！」

—

「間違えてないな、ヤルハ先輩」

「いや、黙るわけにはいかない！」

なぜ？

「あんたが言つた言葉は、アルフイスにも該当する、だからだ！」

卷之三

「興ざめだ、ルノ・アーカディア、貴方は、ここにいていい人間じやな

卷之三

「セルディニアス・ラルグリスか

確か、お爺様の教え子にそんな名前の子がいたような・・・

「クロノ？」

「なんか、嫌な気分だ」

「それは、女ができたからだろ？」

「ルディ？ その傷どうしたの？」

「セルスに殴られた」

「え？ どうして？」

「俺が知るか」

「「はあ」」

「遅かつたみたいですね・・・」

「アシリ？ 大丈夫だつた？」

「ええ、何とか」

「これから、大変になりそうですね」

「そうだねえ」

学園内　：廊下

「ああ、俺は何をしているんだ!!」

「・・・馬鹿だな？ お前」

「そ、そんなこと言わないでくださいよ！ リュウネさん！」

「知るか！」

「どうしよう・・・」

「こつちもこつちで前途多難になりそうだ

「お恥ずかしい・・・」

「いや／＼かつこいいね！」

「うるせえ！」

「おや？ お手紙が届きましたね」

挟み C (ー・ω・ー) つ手紙

『俺の登場は？ いや、俺たちの登場は？』

「なんか、ごめん」

「おい作者!?」

「つ、次のプレイバックです！」

闘いの闘士

セルス邸

「な!?なんだお前は!?

「おれは、ルノの兄・・・『フギル・アーカデイア』だ」

「お前が!?

「フギル・・・・・・フギル・アーカデイア・・・・こいつが、師匠の

言つていた要注意人物・・・

「おいおい、そんな身構えるな」

「何が目的だ?」

「ルノを『殺せ』

「なに!?そんなことできるわけが!?

「出来るさ?」

「俺の力を使えば」

「何なんだ、いつ・・・まるで、神を名乗つて いるような・・・

「どうする?」

「私は、そんなことは出来ない・・・」

「なぜ?」

「簡単だ! 私たちは神じやない! 人間なんだ! それに! 私は、師匠
に・・・ルノの祖父に、彼女達の安全を任せているからだ!」

「ちい、あのジジイ・・・余計なことを・・・まあ、いい・・・

「また来るさ、その時は、俺に『殺される覚悟をしておけ』
何だつたんだ・・・あの男・・・

「いや、初登場おめでと!」

「なんか、原作とキャラが違いますか？」

「いいの、いいの！だつて、二次創作だもん！」

「メタイ！」

お別れコーナー

「さて、お別れの時間だ」

「今回も今回で早いな!?」

「だつて、次回コラボなんだんだもん！少し休みたいの！」

「四つも出しといて休みたいとか言うな！」

「だつて作りたかつたんだもん！」

「ガキかあんたは！」

「うるしえい！俺がいなかつたらおめえ産まれてねえんだからな！」

「ぐつ・・・・・」

「じ、次回をお楽しみに〜」

切皇白夜＆コラボ編

執事と妹

「執事と妹

「ふふ、待つていてくださいね？我が主・・・ルノ様」「早く行こうよ、白夜！」

「はい、分かっていますよ『ナユリ様』

パラレルワールド

「おや？ ブリツツ、これを見てみな？」

「なんだい姉さん？ 今忙しいんだが？ って、エニグマがどこかに繋がってるねえ？ 行つてみるのかい？」

「行きますかあ！」

クロスファイード：アカデミー生徒会室

「セルス先輩、この資料これでいいですか？」

「済まないな？ 頼んでしまって」

「いえ、俺の仕事ですから」

いま、俺達がいるのは、アカデミーに新しく作られた生徒会室だ。数ヶ月前の騒ぎが嘘なように平和で静かに過ごしている気がするが、この平穏がいつまで続くか？

「ルディ！ セルス先輩！ 来てください！」

「ど、どうしたんだ？ クロノ？」

「いいから！ 早く外に！」

「外？」

アカデミー上空

「なんだ？ あれ？」

「なんでしょう・・・嫌な感じがします」

「大丈夫、アイリとミイシャは、俺が守るから」

「よろしくお願ひしますね？旦那様」

ミイシャとは、俺とアイリとの間に生まれた子供だ。幸いにことに、髪の色はピンクで、旧帝国特有の銀色にならなかつたのは、不幸中の幸だつただろう。何せ、今でも新王国には、旧帝国をよく思わない人がいるからだ。

「ワームホール？あ、消えた」

「お、おいクロノ！引つ張るな！」

「あれ？ワームホールは？」

「今しがた消滅したぞ？」

出遅れた！？く、くそおおお！！

「ホントにあつたんだ」

「まさか、エニグマが起動したんでしょうかねえ？」

「誰だ！」

「お初にお目にかかります・・・ルノ様並びにアイリ様の専属執事をしておりました、切皇白夜と申します・・・いざ、お見知りおきを？アイリ様の旦那様、フィールス・アイングラム様も？」

なんだ？こいつ・・・どこか、底知れない闇が見える気がする・・・

「久しぶりだな？白夜？」

「はい、リュウネ様」

「リュウネさん・・・彼は、まさか？」

「帝国の狂刃・・・切皇白夜だよ」

帝国の狂刃とは、旧帝国が存在していた頃にいたとされる暗殺者のことだ。

「ルノ？」

あれ？なんで、あんな顔してるんだ？まるで、家族の仇みたいな

顔・・・

白夜は、ルノの仇なんだよ・・・もう1人の妹のな・・・」

「え・・・・？妹？でも、俺が知つてるのは・・・・

「アイリだけだろ？でも、もう1人居たんだよ」

もうひとり・・・あれ？俺、どこかで会つてゐるのか？いや、そんなわけ・・・・いや、あの子か！？

「あの、ルーチayan・・・ルーチayanのもう1人の妹つてさ？ナユリつて名前？」

「そう、だけど？」

「呼んだ？フイーくん？」――(w.)

「え？ナユリ！」

「う、うそ？だつて、あの時・・・・」

「ナユリ様は、私が連れ出しました・・・あの日、特殊な薬を使われ、凌辱されていた、ナユリ様を」

「え？」

女性にとつて、凌辱とは、しにも等しいことである。しかも、アーカディア帝国の生き残りだ・・・これがどんな意味を意味するのか、ルノとアイリは、瞬間に、理解していた。

赤歯車ノ機械人

赤歯車ノ機械人

私こそが！神だアアア！！

b y 檀黎斗神／宇佐美幻

「久しぶりだね？お姉ちゃん達」

「ナユリ・・・なゆりいい！」

（・・ω・・（。ーーー。）ゝ

「もう、久しぶりに会つてそうそう、ハグなの？」

「だつてえ～」

『そう言つた事は、また後日やつて貰えませんかねえ？』

「!?だれだ！」

「なに？あれ？歯車？」

『私は、ライトカイザー・・・ま、赤歯車とでも呼んでくれ』

「てめえ・・・ブリツツ・・・」

『おや？どこかで見た顔だと思ったら、「観測者」じゃないですか？』

「・・・この世界で、何をする気だ」

『さあね？でも、異変は怒つてるみたいだぞ？』

「!?・・・まさか！」

クロスファイード：アカデミー男子寮

「な、なんだコイツら!?」

「怯むな！できるだけ数を！」

「無理だティール！こいつら剣で切つても倒せねえ！」

なんなんだこいつらは？いや、それより、一体どこから湧いてでた

!?

「ティールくん！」

「ルノ先生！」

「あれは・・・バグスター!? なんで!?

「でも、色が違いますよ?」

「あれは、ネビュラバグスター・・・」

「ネビュラバグスター? 普通のバグスターと何が違うんです?」

「強さだけだが・・・この場合は、機竜が使えなくなつてゐかもな・・・」

「確かに、さつきから反応がありませんからね・・・」

「とりあえずは・・・これでも使つてろ」

「これは?」

俺が渡したもののは、『仮面ライダービルドガシャット』と『ガシャコンウェポン』だつた。

「これでどうしろと?」

「それなら敵を倒せる・・・それぞれの戦い方にあつたものを渡してゐ
から・・・それで頑張ついてくれ」

「どこへ?」

「すこし、野暮用だ」

そう言つて俺は、その場を去つていつた。そして、残らせた皆は、そ
れぞれが戦う場所へと散らばつて行つた。

そして、俺が向かつた先は、森の奥にある鳥居だつた。

「紫・・・」

「何かしら? リュウちゃん」

「俺を・・・つて世界に送つてくれ」

「あら? いいの? こつちに連れてこれる人数が限られるわよ?」

「構わん・・・その時は、俺が出るまでだ」

「あらあら・・・無理して、妖夢と鈴ちゃんに怒られないようにな?」

「・・・言われるまでもない」

「分かつたわ・・・でも気おつけてね? 多分・・・」

「分かつてる、すぐに戻るよ・・・」

「おわなくて良かつたの？」

「構いません……あの人のやることに一々突っ込んでいられませんか
ら」

「全くよ……私の体を直した時だつて、別世界から医者を連れてくる
とか……」

相変わらず無茶をしているみたいね？リュウちゃん

蒼歎車ノ機械人

蒼歎車ノ機械人

”仮面ライダーになつた者”が皆から認められるわけじゃない。
”皆から認められた者”が仮面ライダーになるんだ。

・・・仲間を忘れるな

b yうちはイタチ／情報屋迅龍牙

—ゲンムゼロワールド—

「ふう・・・・着いたか・・・・」

「ここは、俺が『想像』した世界のひとつ

「あいつを探さないとな・・・・」

—戦姫ワールド—

「倒しても倒してもキリがないよ！」

「できるだけ数を減らしたいものですけどね・・・・」

「こちらでは、かなりの数の敵を倒しているにも関わらず敵が減ることはない。」

「どうするんです!?」

「どうしようもないかなあ？」

「事実このままだと、こちらが負ける・・・かと言つて打開策がある
わけでもないのも事実。」

『いい加減、諦めたらいいんじゃない？』

「そんなこと・・・できるかあ！」

「いいねえ、気に入つたよ！」

「な!? なに!?

「ルディ！ デバイスが！」

「な、何が？ うわ!?

「ルディ!?

ルノが声を上げた瞬間、その場にリーゼシャルディはいなかつた。
『んく? どこに行つたんだく?』

—デバイス内—

「こ、ここは?」

「ここは私の世界さね? 主」

「お、お前は? 誰だ?」

俺の目の前には、金色の髪に赤いメッシュの入つた女性? が立つて
いた。

「私は、ティアマト……とある人に頼まれて、君に力を上げるのさね」

「そう、あの赤歯車を倒せる力だ」

「そうか……でも、ひとつだけ約束しろ、力の主導権は俺によこす
と」

「いいだろう、『奴』とは、そういう契約だつたからな?」

この時、俺は……奴についてわからなかつた。それでも願つてしまつたのだ……限界を超えた力を

s i d e ルノ

『ん? なんだあ?』

「る、ルディ?」

「培養・・・」

『なにイ!?』

『INFECTION!』

この力は、ルノを・・・

『レツツゲーム!』

みんなを!

『バットゲーム!』

守るために俺が手に入れた!

『デッドゲーム!』

力だ!!

『ワツチャネーム!』

『ザ・ティアマト』

「ウオオオオオオ!!」

私の目の前に、神装機竜を小さくしそれを纏つたルディがでてきた
た・・・一体何が?

「ルノ、ここは俺に任せてください』

「ルディ!?

『なるほど・・・ゲームの力と”鬼龍”の力・・・その両方を使うの
ですね・・・いいでしよう私も参加します』

「誰だ!?

『あ、姉さん・・・くるのはやいよ』

『それでも無いでしよう・・・もう1人来たみたいですからね・・・』

『バレたか?ま、仕方ないことか』

「だ、誰?」

本当に誰なのだろうか?こんな人私は知らない。第一こんな人いたつけ?状態なのだから。

『仮面ライダー・・・ゲンムゼロ・・・で分かるか?』

『ゲンムゼロ?』

「さて……そこの君！」

そこの君？一体誰のことを言っているのだろう？そして彼は一体……何者なのだろう？

『私についてこれるか？竜戦士くん？』

「もちろん！』

「よろしい……では！』

『マイティアクションZERO！』

『マイティアクション……？それって確か……』

「グレード2！変身！」

『ガツシヤツト！ガチャー！レベルアップ！』

『マイティパンチ！マイティキック！マイティアクション！ZERO

！』

『ノーコンティニューで！クリアするぜ！』